律女の父は徳川麾下の士で、千石餘の祿を食んでゐた。士農工商の嚴しい階級があつた當時には武士の威勢は非常なものであつた。中にも所謂旗下八萬騎は、大將軍直ぢかの股肱で、世に頗る巾を利かしたものであつた。殊にその千石取りといへば大身の武家である。

律女はさうした身分に生れたのである。生れついた麗顏皓齒、柳の髮、雪の膚を綺羅粉粧に裹んで、世の荒き風通はぬ深窓の裡に人に婢仕かれて育つた愛娘であつた。その容色と並んで資性また賢しく、讀み書くことは云ふまでもなく、音律茶香の末技に至るまで、みなその道の精しさに入り、繪事も一種の雅致ありと人の賞めそやすほどの才媛であつた。斯かる身分に生れ、斯くの如き資性を備へた佳人の身に、缺くることなき圓滿な、幸多き天地が開かれねばならぬ、それが當然であるべきかのやうに思はれるではないか。俄然、魔の手はソコに下された。律女の父は或る事情の下に祿を離れて浪人の身となつたのである。武士の祿に離れたのは猿の木から落ちたのよりも哀れなものであつた。水を離れた魚のやうに慘めなものであつた。律女の父は妻子を携へて京都に移り、さる方に寄食することになつたが、固より身に覺えた活計の業もなく、忽ちにして洗ふが如き貧に苦しんだ。最後どうにも遣り切れなくなるに至つて、律女は身を島原の遊女に沾ることになつた。留め度なき熱き涙が、如何に悲歎に沈む親子の眼に湧き溢れたであらう。極端なる身世の變轉よ、あはれ一斤無垢の白百合は揉み摧かれて溝泥の中に投げ込まれたのである。

遊女となつた律女は、島原で大橋と名乘つて出た。固より彼女の容色である。彼女の才藝である。名妓大橋の名は一時に洛中洛外の嫖客を醉はした。併しながら彼女は到底彼女である、うき川竹に流す浮名のいよ〳〵高まるにつれて彼女自身の心は日々に沈んでゆくのであつた。甲斐なき美き思ひ出に深窓の昔を偲び、「たれとなく、ひと夜あふみのかゞみ山、契りし人は影を殘さぬ」現在の身の賤しさを深く恥ぢ悔んで、つひには思ひ募つて病氣となつた。脈を診て解かる病ではない。藥を服んで癒る患者

ではない。醫者は終に匙を投げるより外なかつた。

と、或る日一人の客がつく〳〵大橋の容子を觀て「お前は何か非常に心を痛めることがあるだらう」といふので、彼女は精しく其の理由を語つた。客の云ふには、「此の病は黄金千兩を積むとも容易に癒るまい。併しこゝに唯一の根本から治脱する法がある、がお前はおそらく信じ得ないであらう」と、彼女は此の言に大に動かされて、「貴方が誠心で仰有ることを何で疑ひませう、どうぞ精しく敎へて下されませ」と只管に請ふのであつた。客はついに敎へた。「お前の一身、見聞覺知の四つのものを除いて外に作用くものは一つもない。此の四つの作用に其の主たるものがある、それが佛性である。お前が若し行住坐臥、如何なる時、如何なる處に於いても、見るもの是れ何ものぞ、聞くもの是れ何ものぞと、間斷なく我が本心を省み、怠らず究むるならば、本具の佛性は忽然として現はれるであらう。果して能く佛性が明かになれば菩界の夢は覺めたやうに解脱することが出來る」といふのであつた。大橋は此の言を信じて、それより後は獨り潛かに練心の工夫を專一にして、寸刻も怠らなかつた。

禪の修行は練心の工夫にある。工夫專一にして胸次澄徹しあらゆる散亂麁動の妄想幻影を撲滅したとき、そこに本來の靈覺が赫燿として大光明を放つのである。たゞ禪の機は電光石火である。綿入の上を櫑木で撫でるやうな手緩いやり方では永刼にも修證の一路は見出せない。深思默想、練心を專らとするといふその心術は、徹底純一でなければならぬ。自分の心も身も全體を擧げて拋り出し、すべてを棄てきつた所にすべてを拾得するのである。

私たちが大海から一つの水甕のなかに水を掬む時、私たちは水の重さを感ずる。けれども私たちが甕を捨てゝ大海そのものゝなかに躍り込む時に、私たちの上から、幾千倍の水量が湛へられてある。けれども私たちは少しも水の重みを感じない。

私たちは自分のちからを以て自我の水甕を運ばうとしてゐる。そして私たちの

苦痛や快樂は、私たちにその重みを感じさせる。けれども私たちが個我を捨てブラアマ自身の大海のなかに入るときに私たちは何の苦痛をも悲哀をも知らぬ。

私たちは自己中心の水甕を捨てなければならぬ。

赤裸々の自分を提げてブラアマのなかに躍り込まなければならぬ。

是れ最近世界の學界を撼かした印度のラビンドラ・ナート・タゴールの言である。是に於いて吾々は、かの言ひ古された「大死一番大活現成」の禪語に、今更の如く新なる意義あるを覺えざるを得ない。然り！、大死底の人と成り得て始めて禪機を伺ふことが出來るのである。靜座といひ、瞑想といひ、練心の工夫といふも、まさに大に死にきるといふ徹底的な、純一無雜の心要がなくては何もならぬ。

管子の言に「之れを思ひ、之れを思ひ、又重ねて之れを思ひ、之れを思ひて得ざれば鬼神將に之れを告げんとす」とある。何ものをも思はぬ者は固より得らるべき何ものもない。之れを思ひ、之れを求むること切實なるものあつて始めて得られる。宇宙は一大寶藏である、眞理は到る所に遍滿して居る。求めよさらば與へん、之れを求むれば觸處に得られる、求めて得られぬことは曾てないのである。

引力の法に於いて之れを求めたニュートンは、ポタリと落ちる林檎によつて之れを得た。蒸汽の力に於いて之れを思うたワットは鐵瓶の蓋のガタリと持ち上がる所に向つて之れを得た。箇の不思量底を思量し、つひに非思量の妙悟を得るといふ禪の修證は丁度そんな趣があると謂へるではあるまいか。されば香嚴禪師は庭箒く時、持つた箒の先で撥ねた石礫が籔の竹に當つてカチリと音がしたその刹那にハッと本來の自己を徹見したといふ。靈雲和尚は、咲き匂ふ桃の花のそよ吹く春風に片々と散り飛ぶのを眺め入るとき、廓然として始めて本地の風光を見得たといふ。年々春來れば桃の花は誰でも見る、而も靈雲和尚のみひとり此れによつて此の妙諦を悟つた。石の竹を擊つ聲は聞かうと思へば香嚴禪師ならずとも、何時でも聞かれる。而も香嚴禪師のみひとり此れによつてこの眞悟を得た。共に箇の不思量底を思量して止まなかつた人々

であるからである。間斷なき工夫專一の士であつたからである。

客の言を信じた大橋の工夫練心は專念純一、殆ど寢食を忘るゝほどであつた。延享年中のことである。一日に二十餘ヶ所に隕ちたほどの大雷があつた。大橋性來雷を懼るゝこと甚しいので、例もするやうに蚊帳を吊つて中に遁げ込み、夜具引被つて、魂も身に添はぬ思ひで縮み上がつてゐた。が、ふと、前の客の言つた修行のことを思ひ浮べた。「おゝ自分には何ものよりも大きな、何ものよりも强い佛性とやらがある筈、雷が何で恐からう」と、斯う氣を取り直して、戰く心に鞭ち慄へる脚を踏みしめて起き出で、戸外に面つて座を占めた。

空は墨磨りながし磨り流がし綿雲を染める、綿雲は重なり重なり頭上まで眞闇に覆ひかゝる、燁々と紫電の矢は左右を縫うて飛ぶ、雨は下界が海になれよと降りしきる、殷殷と鳴る雷は大地も粉に碎けよと轟く、凄絶壯絶の前に、大橋は端然として動かなかつた。と、閃一閃、眼に銀の針が、ッと腦後に射貫いたと思つた。次で轟然として霹靂落下、頭上より壓し潰されたと思つた。刹那、彼女は氣絶してゐた。雷が彼女の面前まぢかく庭内に落ちたのであつた。

やがて蘇息つた。蘇息つた彼女は、見聞覺知、全然從來と異り、腔内一氣廓然無碍、喩へ難き輕快の情の溢るゝを覺えた。勿論病狀は夢が覺めたやうに拭ひ去られた。大橋は悟りを得たのである。タゴールの所謂僅かの重量に持て扱つてゐた從來の水甕の水を抛擲して其身全體が佛性海中に飛び込んだのである。彼女はさしも忌み懼れた迅雷の前に克く端坐不動なるを得た、所謂大死底の人と爲り得た。而して所謂大活現成の域に入り得たのである。

大橋既にこの境致を得て、歡喜に充ち滿ちた日々を送ることが出來るやうになつたが、境遇が境遇であるので、然るべき善知識に遇うて證明を受けることが出來なかつた。禪の悟りには正しき師家の證明を受けねばならない。小悟に安んじ若くは誤つた悟りを執持する者は、却つて未悟の者に若かざる邪見に墮することが多いからである。

大橋はその後島原を出てから、白隱禪師に相見して、親しく實參した。それは禪師が京都に滯在中を、世繼氏の宅に訪うたので、寶曆元年の春のことであるといふが、其の時大橋が如何なる所問があつたか、禪師が如何なる垂示を與へたか知るに由ない。

その頃京都に栗原一素といふ奇男士があつた。一通り洛中の人々にも知られ、自分でも何事でも知つて居る物識だと豪語してゐたが、人と爲り豪宕磊落、少壯より放蕩で隨分美少年騷ぎなどもしたもので、家產は夙に散じ盡した一寒措大であつた。大橋は世話する人があつて此の一素の妻となつたのである。數奇なる運命の手に採ばれて、一たび死してまた活きる底の修養をした大橋は、此の俗世間を茶化した奇男子と相得て意氣合し、枯淡淸貧の中に幸福な家庭を持つた。夫が微醺を帶びて謠曲でも唸つて居る傍ら、婦は源氏物語を讀みながら飯を焚く、男が一瓢を腰につけて東山に遊べば、女は握飯を首にかけて西山におもむく、夫が詩を作れば妻は歌を詠む、互に才を鬪はし、樂みを與にし、浮世の富貴を飛塵とも思はず、苦樂榮枯の外に、日々心の天國に遊ぶ境涯であつた。後に夫婦つれて有馬の湯治に幾日かを過ごしたことがあつたが、其處で大橋は一素の許を得て髮をおろし、尼となつて名を惠林と改めた。

大橋の死んだ年月は明かでない。が夫に先だつて死んだといふ。其の葬送の折、一素は白隱禪師の上足、東嶺和尙を請じて燒香師とした。東嶺和尙が往つて見ると、壇上ただ觀音菩薩の像を安置して、惠林の位牌を設けてない。どうしたわけかと問ふと、一素は「惠林は謂る婦女の身を以て得度すべきものには即ち婦女の身を現じて說法する觀音の應現でござる。今こゝに觀音の像を安置すること、何も怪まるゝに及びますまい」と云つた。東嶺和尙はまた之れを聞いて何も云はず、默つて香を拈じて歸つたと傳へられて居る。「婦女の身を以て得度すべき者には即ち婦女の身を現じて說法する」といふのは、法華經普門品、即ち觀音經の語である。之れから推しても栗原一素の尋常人とはよほど變り者であつたこと、及び彼の妻としての大橋が平生の面目もさこそと想ひ見られるではないか。

大橋の詠んだ歌は少くない。世に知られてをるのは、

自畫の賛

わするなとちぎりし春は夢なれや
　ねざめとひくる初雁の聲

海邊の雪

和田の原波もひとつに苫しろき
　雪をのせたるあまの釣舟

老後島原を過ぎて

よそにみておもふもつらし身の昔
　うき川竹のさとの夕は

等であるが、いづれも女性のやさしみが匂ひ出て居る。最後のは老後に島原を過ぎて、ありし昔の起き臥しを思ひ出でた彼女の深き感慨が察せられ、そゞろに哀れを覺えしめる歌である。また遊女の圖に題した文がある、亦やさしい筆である。

西にながれ東にながるゝ、おなじ川たけの身にしある中にも、八重垣つくると詠じたまひし神垣のほとりは、いともやさしく、繪にかけるを見てさへ、まことなつかしうおぼゆ。しかはあれど、このふたりのすがた、こゝにかきあらはさるゝさきは。ありやなしや。

辻君の、絶えぬ流の思川、戀にはぼ
そる柳かげ、しばしとめたる三日の
月、櫛のむねさへ小夜風に、さらり
と解けし洗髪、結んで清き水の音

——俗謡

泥中の蓮

其一　遊女鷗洲

傾城に誠なし――汚泥裡の蓮――大橋の妹分――才色優絶――心要を究む――錢屋清調――
座敷牢――錢屋の妻が貞良――鷗洲の出家――春叟の詩――その末期

『天地開け始りて、實ある傾城と、迦陵頻伽の雄鳥は繪に書いたも見たものない』などゝ戯曲文にも書かれて、遊女傾城の輩は、總ゆる手練手管を腹に藏してたゞ口車に巧く浮かれ男を乘せて湯水の如く金を浪費させるのが唯一の功名、實意の意情のと、其は畑を堀つて蛤を得んと望むよりもおろかなことである、とは昔から世俗に殆ど定説のやうに言はれて來て居るところである。花柳界のいよ〳〵墮落した現代に於いては、殊にこの定説が動かすべからざるものゝ如き觀を呈して居る。

が、汚泥裡にも清蓮は亭々として嬋妍の花を開き馥郁の香を放つ、浮き川竹の浮き

沈み、泥水稼業と謂はれる境界に在つても、識見あり、義氣あり、才情に富んだ、優に烈女傳中にも入れらるべき傾城の、往時に間々出でゝその名を後代に謳はれて居るものゝあるのは、境界が境界であるだけに、それらが恰も綠草中の點紅の如く一段の異彩として認められなければならない。しかし、此の稿は、烈女の傳を叙するのではない。遊女考を記するものでもない。こゝには、それらのうちから佛敎と蜜緣を有つた數箇の事例を取り出して、所謂泥中の蓮なる芳ばしい香ひを止めることゝしよう。

濁りに染まぬ花蓮として、前に擧げた大橋の如きはその最も清く芳しいものであつたが、大橋が島原に勤めてゐた比、同じ樓内の朋輩に鷗洲といふ大夫が居つた。大橋とは姉妹分といふ親しい間柄で、大橋は姉分、鷗洲は妹分であつた。大橋と並び稱せられるだけに、鷗洲も亦資性慧聰で容色才藝ともに他に優絶してゐた。さうして大橋と親しい間柄であつたゞけに、亦同じく内面安立のことに深く意を注ぎ、大橋から心要を聞かされもしたりして、ひそかに省發するところがあつた。

その頃京都の富商で錢屋清調といふ者が、鷗洲の色と藝とに打ち込んで足繁く通ひつめるのであつたが、つひにはこの花手折つてあかぬながめを充たさねばと、大金を擲つて身受けし、妾宅に置いて鍾愛至らざるはなかつた。

鷗洲に對する愛に溺れた清調は、妾宅に圍うて置くのでは滿足が出來なくなつた。で、罪もない本妻を逐ひ出して、とう〳〵鷗洲をその家に入れることにした。それは忽ち親族間の憤激を買はないわけにはいかなかつた。親族は相談の上痛く清調を詰責し諫誡して再び本妻を歸らしめ、さうして鷗洲をば一室に幽閉してしまつた。

清調の妻は非常に之れを憐んでしば〳〵人を遣つて物を贈つたり、親切な慰めの言葉をいろ〳〵と言ひ送つたりするのであつた。鷗洲はその貞良に感激し、その同情に泣謝した。さうして遂に清調に自分の意中を詳しく話して暇を請ひ、夜潛かに遁がして貰つて戸外へ出た。彼女は幽閉の座敷牢から遁れ出たが、再び汚れた元の牢獄のやうな生活に入らうとは勿論しなかつた。彼れが強い決心をしたその志は、更に大きな、俗的人生火宅の牢獄から遁れんとするに在つたのである。で、彼女は、その足で一直線に北山寂光院に向つた。さうして罪深き女人の現身に、佛の慈悲智慧光明に接して、無碍寂光の安樂國に遊戯すべく、直に髪を卸ろし、昨日の粉粧綺羅を墨染の法衣姿に代へた。法號を知雲といつて、只管辨道に精進してゐた。儒者春叟が曾て北山に遊んだとき、變つた姿の知雲尼を見て深く感じ一詩を賦して與へた。

綺羅叢裡脫迷沈。　絃管何如鐘磬音。
細雨殘花山院寂。　想應無夢亂禪心。

この詩を見れば、彼女が絃歌聲裡に綺羅を飾つた島原の往年は、今や鐘磬の陰に響いて消えゆくやうに、跡なき夢幻に過ぎず、たゞ細雨絲の如く殘花に濺ぐ閑寂の山院裡に、心海波平かに不退轉の禪心を養うてゐた安詳たる情景が想ひ見られる。

その晩年病に臥するや、自ら命を知るものゝ如く、固く醫藥を退けて受けつけなかつた。そして人を使はして大橋を呼んで來させ、枕に倚りながら自己平生の心事行事

を心静かに語つて聞かせ、またかの銭屋の妻女に受けた殊恩を繰り返して、よきなに傳へられ度しなどと遺言し、心安らかに悠然として最後の呼吸を引き取つた。

春の日の念佛ゆるき野寺かな　——尚白
尊かる涙やそめて散るもみぢ　——芭蕉
尼寺やたゞ菜の花の散るこみち　——言水
菜の花に朧一里や嵯峨の寺　——鳴雪
晩鐘の響の中やほとゝぎす　——羽紅
たらちねの暖婆や冷えん鐘の聲　——鼠弾
夜や月や花の扉のさゝである　——草司

其二　遊女佐香保

吉原の名妓——唯一の情郎——情郎の死——厭世と道心——深夜奉行所を叩く——楼主の同情——素願を遂ぐ——その晩年

佐香保は江戸吉原並木楼の名妓であつた。資性慧しく、風姿窈窕清閑、遊女風情には稀に見るの品格を備へ、さながら良家の淑女の如き風があつたといはれて居る。

斯ういふ風であつたから嬌名一時に高まり、うつゝをぬかして通ふ男も夥多あつたが、未だ佐香保が精神を許したものは一人もなかつた。ところが正保年間、西國のさる大諸侯が江戸へ下つた時、その侍臣の梅某、一夕並木楼に登つて初めて佐香保を見、その美しい風貌と美き情味とに恍惚として心魂を投げ入れた。佐香保もまたその武士の風骨意氣に商賣氣を離れて眞情をうち込んだ、結ぶの神の赤い糸に繋がれたのか、斯うして一夜の逢瀬に二つの胸の温い情は一つに溶け合つた。

その後その武士は頻々に通うて、二人の仲は蜜のやうに膠のやうにいよ〳〵離れ難いものとなり増さり、果ては近いうちに身受けして、天下晴れて二世を契るべき固い約束をも取り交した。然るに間もなく君侯が病氣の爲めに歸國することになつて、近習たるその武士も扈從して出立せねばならなくなつた。歸國の後君侯は藥石効なくして亡くなられたが、平素殊遇に感激してゐたかの武士は、君恩の萬一に酬ゆることもせず、あへなく永き分れとなつたことをひどく歎き悔んで、せめては死出の奉公をと、腹掻き切つて殉死を遂げた。猛き心の義士にも、かの深き契りをこめた佐香保の美しい優しい俤は綿繾として最後まで眼にちらついた、彼れは懇々と說示や慰諭の意を書き遺し、數點の紀念品に添へて佐香保の許に贈つた。遺書の端に書きつけてあつた歌に、

かつむすびかつ消えかへるうたかたの
　戀ははかなきちぎりなりけり

とあつた。これを受け取つて見た佐香保の悲歎慟哭の狀は眼もあてられぬあはれさであつた。幻滅無常の大なる悲みに遭遇して、身も世もあられぬ厭世觀に陷るのは、殊に情に脆く心弱い女性の常である。併しながら、適々それが、敬虔な宗教的信念を發起する動機となり、眞面目な精神生活に向上するの入門となることは、古今多くその例を遺して居る。佐香保も亦その場合この道順を追うた一人であつた。

哀悼悲傷の涙に身も浮く思ひをなした佐香保は、やがて甲斐なき悲歎から蘇つた、そしてその傷ましい變轉に如何に自分を處くべきかの道に就いて強い決心をした。それから數日の後、一夜悲雨蕭々として四顧暗澹たるの時、自らその黑髮に鋏を當てゝ愛着執相の根本からふツつりと斷ち截つた。さうして深更人靜まるのを待つて潛つと樓を脫け出て、急いで町奉行所へ往つた。彼女は役人に向て、自分は夙に佛に歸依すること篤く、專念修行の身になり度いと志求するのであつたが、何をいうても苦界の憂き勤めで意のまゝにならずに、今日までそのまゝで來た。しかし今日はどうしても

切なる志願を抑へることは出來なくなつたので、斯やうに、髪を切つて樓を脱け出て來たわけである。御役人樣の御なさけで、どうか樓主に諭して妾の志を遂げさし賜はれ、といふ意味を繰り返し述べて歎願するのであつた。奉行所の諸役人みなその辭氣の愷切なるに動かされ、その心情の深刻なるに憫れを催して早速樓主を呼び出し、佐香保の志を遂げさすやうにと諭した。樓主は、更に異議を挾まず、佐香保が人と爲りの溫順なるを稱揚し、幼少より二十年の久しき、常に樓主を思うて忠實に勤めてくれたのであるから、この上は本人の志のまゝに任せる、と誓つて相携へて奉行所を引き取つた。

斯うして佐香保は尼となつて貞閑と號した。樓主は特に一菴を建てゝ與へようと言つたが、彼女は固く辭した。自分はまだうら若い女の身で、若し菴に獨住ひして測らざる障碍の爲めに切角の道心を汚されるやうなことがあつてはならぬから……と、そのまゝ樓内の一室に置いて貰ふことを請うて、日夜佛に事へ彼の武士某の菩提を弔つてゐた。

その晩年に至つて、鎌倉の玉繩の里に自ら草庵を結んで移り住んだ。さうして道心いよ〳〵堅固にそこで行ひ澄まし、心安らかに法悦に飽滿した老後を送つて、八十餘歳で幸福な未來の天國を觀念しつゝ大往生を遂げた。

荒れのみまさる人の世に。せめては匂ふ戀の花。脆きはたれの咎ならむ。星のまなざし月の眉。たゞ思出の種として。いづち消えゆくまぼろしぞ。

——晩翠

其三　遊女吉野

島原の名妓――吉野廣東――大名と小倉色紙――僧日經との相見――痴人錄冶屋茉――灰屋三郎兵衛――傾城の實――榮庵の鶯歎――平安幸福の境地――奇談に富める生涯――眞乎泥中の蓮

吉野は京都島原で聞えた遊女である。北越の產れで、色白な、眉目秀でた、才能ある絕世の美人で、そのうへ優しい慈仁の情に富み、でゐて一種の俠骨ある性格を有つた珍らしい女であつた。常に豪快な事を好み、世間一般の錦繡珠玉の類は彼女の眼には一顧にも値しなかつた。彼女は居常廣東船來の織衣を身に着けてゐた。俗に廣東縞と稱し、茶人などはそれを吉野廣東と名づけて袱子などを作つて珍重したといふことである。

曾てある大名が吉野の才色を殊の外寵愛してどうかして、彼女の歡心を得んものと、種々な貴い品物を贈與するのであつたが、一として悅びの笑みを買ふことは出來なかつた。愛着の奴となつたその殿樣はいろ〳〵と苦慮したあげく、其の寶庫に秘藏して在つた俊成卿の小倉色紙を取り出してそれを與へた。吉野はこれを得て始めて大に悅んだといふ。彼女は斯うした氣象を有つた女であつた。

ある日、垢じみた古い法衣を服て頸に桒を懸けた一人の僧が來て、是非吉野を見せてくれといつた。樓主が出て、「吉野太夫は當今第一の名妓、輕々しく何人にも逢ふといふことはせぬ、殊にこゝは花街、あなたのやうな佛弟子たるものゝ足を踏み入れるところではないから……」とすげなく斷つた。けれど、その僧はいつかな肯かず、何でも吉野を一目見なければ歸らぬと言ひ張つていつまでも兀立して動かなかつた。樓主もほと〳〵持て餘してゐると、吉野が之れを聞いて、それほどに言はれるものならば逢はう、僧であればとて同じ人間に違ひはない、と早速一室に案內して逢ふことにした。僧は吉野の顏をしばらく凝つと視てゐたが、「もうよし！、さあ歸らう」と言つたそしてかた樓主に向つて「豫て噂に聞けば、吉野に逢ふには莫大な金が要るといふこ

とであつた。愚僧は餘計は持つてゐないが、こゝにこれだけあるから」と頸の嚢から若干の金を取り出して置かうとした。樓主は笑つて、「たゞ一目見たゞけで、幾ら名妓なればとて、なんの金が要らう」とそれを押し還して受け取らなかつた、僧は「あゝさうか、では世の人々は愚僧を欺したのぢやな」と言つて、出した金を復た嚢に納めて飄然と立ち去つた。吉野は始めから、どうもたゞの坊主でないと深く怪んでゐたので、人をして僧の跡を踵けさして見た。と、果してそれは名僧として道譽當時に高かつた鷹峰の日經上人であつた。それから吉野は深く佛法に歸依し、親しく日經を拜して教を受け、大乘の醍醐味に無限の怡悅を得る身となつた。高僧の德か、女丈夫の力か、謂ゆる因緣の會遇か、一たび顏を見合せたゞけで一語を交はさずして分れたが、それが發菩提心の動機となつて、彼女は、身は濁江の境界に在りながら、濁りに染まぬ潔き心の花は香りゆかしくそこに發き出でたのである。

吉野が曾て盛裝して外出したとき、鍛冶屋の某なるもの、途上に不斗それを搔い間見たが、その美しさと氣高さに、殆ど感電でもしたやうに强い感に打たれた。それからは明けても暮れても、吉野の姿が夢にも現にも眼を去らず、恍惚として拔くべからざる心の病みつきとなつた。それから彼れは從來に幾倍して働き出した、そして從來の幾分にその費用を節減した。四五年ののちには若干の金錢を蓄へ得た。そこで彼れはそれを懷にして島原の花街へ出て來た。街上で一少女を捉へて「自分は名高い吉野大夫に逢いたうてわざ〳〵來たものぢやが、どんな手導で逢へるのか」と熱心に訊ねた。その少女は偶然にも吉野の侍女であつたが、その男の如何にも素撲で野卑な風貌を見て白痴か風癲でもあらうと、嘲笑を浴せながら內に入つてその由を吉野に告げた。吉野は靜かに侍女のはしたない擧止を誡めて、別に人を遣つてその男の來意を聞かしめた。そしてその數年來の切なる情と、それが爲めの勤苦とに、ひどく感動もし憐憫をも催して、早速一茶亭に引き入れ、杯盤の裡に快く面會していろ〳〵と潤ひある語を以て慰めた。

その時丁度吉野の情郎たる灰屋三郎兵衛といふ富豪が遊びに來てゐたが、さすがに粋人で、かの男の意中を諒察して、吉野に、出來るだけのなさけをかけて彼れに滿足さしてやれ、と言ふのであつた。吉野は既に最初から甚大な同情を以てゐたところであるし、且つまた檀那のこの口添へもあつたので、遂に身を以てその男に許した。男の悅びはたとへんにものなく、いづれ千金を擲つて身受けする、などゝ誓つてやがて雀躍して歸つて往つた。

その翌日、桂川に身を投げた一人の男があつた。それはかの鍛冶屋某であつた。一通の遺書があつたが、それには、今や積年の思ひを遂げ得て、この上世に思ひを遺すことは更にない、といふ意味を、おぼつかなげな筆に管々しく書いてあつた。吉野はこれを聞いて愕然として、とむねを打ち、そして泫然として眼を拭うた。

灰屋三郎兵衛はつひに千金を以て吉野を贖ひ、ある町家を借りて妾宅としてそこに居らしめた。ところが三郎兵衛の父の榮庵は頑固な老人氣質から、遊女にうつゝをぬかす放蕩息子は家に置くことならぬ、と激怒して勘當してしまつた。家を逐はれた三郎兵衛はやがて喪家の狗の如に飢寒に泣かねばならぬなさけない身となつた。それを見た吉野はかの小倉色紙を賣つてその急を救うた、彼女に取つては如何なる貴重品にも代へられぬものであつたものも、戀ふる男の爲めには惜しげもなく拋たれた。傾城に實なしといはれるが、遊女吉野には、女の生命たるこの純一な熱烈な戀の眞情があつたのである。

榮庵がある日、下僕を一人伴れて外出したとき、思ひがけない俄雨に逢うて、とある家の軒下に立ち、傘や下駄を取りにやつた下僕の歸つて來るのを待つてゐた。と、窓を開けて一人の美人が顏を出したが、やがて表戸を開けて慇懃に言葉をかけ、嘸御難儀でありませう、穢るしいが、中へ入つて下僕の來るまで御一服なされるやうに、と云ふのであつた。辭色甚だ趣きあるのを見、親切な言葉に引かれて榮庵は、然らばしばらくお邪魔を願はう、と導かれるに從つて一間に通つた、見ると、床には銅瓶に

手際よく花が生けられ、几上には上品な書籍が列べられ、古鐺に沸る湯の音はチン〳〵ジイ〳〵と微かに松蟲の音の如くまた蚯蚓の歌にも似て、小室そゞろに清楚閑適の趣きである。やがて前の美人が手づから茶を點じて薦めるのであつたが蕭洒嫻雅の擧止進退、人をしておのづから恍惚たらしめ、また覺へず襟を正さしむるものがあつた。

榮庵はやがて辭して戸外へ出たが、今の美人の風彩にひどく感じ入つて、途すがらもいろ〳〵その素性育ちなどを想像して見て、世の中にはあのやうな立派な女もあるものか、とさへ思ひながら歩いてゐた。と、一人の知人に出會つた。話の序に、息子三郎兵衛が遊女狂などしたおろかさをまたしても繰り返して歎き、今見て來た美人の話しをして、息子もあんな女に思ひを懸けるなら……など愚痴をこぼすのであつた。その人は詳しく美人の家や容子を聞いたのち、それこそ貴息さんが熱愛して居る吉野といふ女である、と告げた。榮庵は大に驚き且つ頻りに尙ほ歡稱して止まなかつた。

三郎兵衛の勘當は直に宥された。さうして吉野と二人は晴れて互に愛し愛されて美き戀をつゞけることが出來るやうになつた。さうしてかの日經上人の許へは、時々に足を運んで、いよ〳〵淨心を專らにして平安な幸福な境地に到り得た。鷹峰には、彼女が永遠の眠りの紀念として吉野塚といふが後の世まで遺されたといふことである。

大名の小倉色紙、僧日經との相見、痴人鍛冶屋某の思慕、情郎が父榮庵の驚歎一として奇ならざるはない、奇を帶びた吉野の性格は斯うした奇談に富んだ生涯を展開した。而も奇中に正あり、飄逸にして眞摯なるところ、豪放痛快な言行のうち、また溫く潤ひあるやさしき情味の溢るゝところ、彼女はたしかに泥中の白蓮であつた。

みだれても人の心をとれるかな
かすみにゑへる青柳のつゆ

——範世

其四　遊女歌川

鄙には稀なる佳人――江戸の某と睦ぶ――江戸見物――百日の暇――三年の約――その死

歌川は、もと越前三國（出村といふ）の花街で泊瀬川と名乗つて全盛を謳はれた鄙には稀に見るの名妓であつた。容色と志操と、ともにすつきりと美しい佳人で、その上香茶生花管絃の類は勿論、一通り讀書の力もあり、手跡も太だ見るに足り、殊に俳諧はその最も好むところであつた。のち花街を出て谷瀧寺の住僧に就いて受戒し、尼となつて歌川と稱し、また流谷女とも號して、宗教的信念の安樂と風流韻事の怡悅とに飽いてその後半生を悠々たる風塵の外に送つた。

江戸のさる大身の士夫某が曾て三國に來たとき、まだその比遊女であつた歌川を一目見て深くその容色を愛し、滯在中は屢々酒杯の間に相見るのであつたが、歌川も亦心から馴染んで隔てなく歡待し、二人が互に睦び合ふ態は、多くの美望の眼を惹いたほどであつた。某が江戸に歸るに臨んで歌川は、自分は年來江戸見物を望んで居るのだが、若し往くやうなことがあつたら、あなたのお宅を尋ねて御厄介になりたいと思ふと言ふと、某は快諾して、是非一度出て來るやうに、と固く約束して分れた。

ある日彼女は、樓主に向つて、江戸見物に往きたいから百日間の暇を貰ひたいと願ひ出た。所謂苦界の勤めの身として、普通ならばこの願ひは思ひもよらない不相應なものとして言下に斥けられるのであるが、彼女の平素の心操にめでゝ樓主は心よく許した。そして、すべての支度のことや、誰かに送らしてやるといふことなどまで親切に心配するのであつた。けれども彼女は、此は久しい前からの思ひ立ちで、日比それ〴〵用心してゐたことであるから、と、すべて樓主の氣つけを辭して、自分が豫て用意してゐた路銀を身につけ、菅の笠に竹の杖といふ扮裝で身輕に門出した。固く辭するにも拘らず、或は三里、或は五里と見送つて來た者も多くあつた。

江戸へ着いて早速彼女は某の家を尋てゆくと、某も非常に悅んで、離の一室を特に

彼女の爲めに定めてくれた。彼女は日々諸所を見物し、或は某とその一室に在つて茶を點じたり、句を作つたり、或は琴曲を弄したりして自由な樂しい幾日かを送つた。が、いつまでもさうした自由な身であり得られない彼女は、ある日某に向つて、おかげで年來の望みを充たして最早心置くこともない、と厚く謝して暇を請ふのであつた。某は別れを惜んで頻りに引き止めたが、彼女は、國を出るとき百日間と日限を定めて暇を貰つて來たので、もう丁度その期日にもなるから、と固く斷つて歸國することにした。某は多くの金品を贐として歸途に就かした。

彼女は樓主と約束の期日までにちやんと歸着した。そして江戸を發つとき貰つて來た多くの金品は盡く樓主への土產とした。且つ樓主に謂つて、今後三年勤めたら暇を貰つて自由の身になることを約した。彼女の出家はそれから三年の約を忠實に勤め果してのちのことである。彼女の終始の言動から推して、如何に蕭洒した、俗を離れた氣象を有つた女であつたかゞ略ゝ相見されるではないか。

尼となつた彼女は、出村の町端に草庵を結んで行ひ澄ましてゐたのであるが、安永六年の七月に微恙を以て、人々の哀惜のうちに還らぬ旅に立つたといふことである。

行く水の一夜どまりや薄氷
目さましに琴しらべけり春の雨
瓜紅のしづくに咲くや秋海棠
奥底の知れぬ寒さや海の音

などは彼女が詠んだ秀句として世に知られて居るものである。

くるわはなれて罪なき月を
いつかみやこの空に見む　——俗謠

其五　遊女黛

薄命な女――その人と爲り――客の死を弔ふ――彼女の慈善――官の表彰――眞の佛敎徒

黛は安政年間の名妓である。初めの名はお兼といつた。甫めて二歳にしてその父と母とを喪うて他人の手に養はれ、八歳のとき吉原の佐野槌樓へ賣られたといふ薄命な女であつた。

殆ど生れ落ちるから斯うした運命に虐げられた彼女は、斯うした運命の爲めには多く拗ぢけた人間と成り勝ちな例に倣はず、天性溫厚で慧しく、樓主に事ふること極めて謹嚴で忠實であつた。樓主も亦彼女の性行に感じ、彼女の不運に同情して特に目をかけて親切に養ひ育てた。長じて黛と名乘つて謂ゆる大夫となつたが、絕麗な姿色風貌と嫻雅な擧止進退とは、一時に其の名を喧傳されるに至つた。彼女は天性の溫厚なるに加へて、深く佛敎を崇信してゐて、よろづ慈悲と誠實とを本として、自ら愼み人

にも對するといふ風であつたので、一たび彼女と相見た客は、みなその和かな溫かな情味に深い印象を止めて永く忘れることが出來なかつたといふことである。

彼女の美しい色と溫い情とは、爲めに心魂を飛ばして通うて來る多くの客を呼んだ。その中に彼女が特に相許した男が一人あつた。末の固い約束まで交した仲で、世に父もなく母もなく倚るべき家もない身の、唯一の賴りとして樂みを將來に屬してゐたのに、天はどこまで彼女に慘酷なのか、その男は苟且の患ひが本で遂に不歸の客となつてしまつた。これを聞いた彼女は、玉の緒の絕えも入らんばかりに慟哭した。が、やがて侍女に命じて齋を設け僧を請じて懇に佛事を修めて男の菩提を弔ひ、且つ手厚い香奠を持たせて男の家に贈つた。「女郎の心と雪駄の裏は、金があるうちやチヤラ〳〵と、金が無くなりや切れたがる」と俗謠にもあるごとく、遊女はたゞ金次第のもの、人の眞の情などは堀つても無いものと平素心得てゐた男の父母は、面り黛の誠實を受け、それに就けても亡くなつたばかりの愛子が生前の思ひ出も更に浚られて轉た感に

堪へず、嗚咽歔欷して深く謝辭を述べ、且つわざ〳〵佐野槌樓に黛を訪ねて往つた。黛はこれを迎へて敬侍すること丁度姑舅に對る禮の如く、酒饌を設けて鄭重に饗應し、やさしい言葉を以ていろ〳〵と慰藉した。老夫婦のものも亦黛を視ること恰も亡兒の新婦の如くにして隔心なく互に語り合ふのであつた。それから後は時々双方往來して親しい同族のやうな關係になつたといふ。

安政二年十二月二日の夜、江戸はかの有名な大地震で人家倒壞し、四方に火災起つて死傷するもの數十萬といふ戰慄すべき大慘狀を呈した。幕府は諸處に大きな建物を設けて、住居を喪つた窮民を收容した。そのとき黛は自分の衣裳首飾の類を賣つて三十兩の金を得、それで土鍋を澤山買つて、假屋に收容された窮民の炊具に供與した。

彼女は一に亡我的の大同情に催されたのであつた。若し自分の爲めとふいならば、それは、亡き父母及びかの情郎への、俗にいふ功德の爲めに過ぎなかつた。決して名を賣り報を釣るといふ如き野心は微塵も有たなかつたのである。けれども、彼女の名はそれが爲めに自然にいよ〳〵高くなつた。そして其の高潔な志行は以て世人の範とするに足るものであるとして、官廳より表彰され銀二枚を賞賜された。

誠實心、慈悲心は實に佛の心である。自利を後にして利他を先とすることは菩薩の行願である。大乘佛教徒たる者は、もとより佛心を心とし菩薩行を理想とせねばならぬ。黛の如きは、身は世から輕薄な汚れた賤しいものと目せられる境界に在りながら、志操行實は、よく佛教を奉じよく佛心を體したものであつたと謂ふことが出來る。

語らひし昨日やうつゝ今日やゆめ
おもひさだめぬ世にもあるかな

——千　蔭

大奮心

宜詳尼

憤せざれば啓せず――大奮心を要す――雪峰の苦修――長沙の激憤――人形のやうな小比丘尼――秘魔道人――憤を發して行脚に出づ――雲山の法と愚溪の道――隱山の家風――常不臥十三年――證契即通――悟後の大用――潙山劉鐵磨の話

孔子は「憤せざれば啓せず」と言つた。敎育とは敎育者が外から或る影響を與へて被敎育者の先天的に有つて居る知能を啓發してゆくものだ、といふやうに今の敎育學でも定義して居る。

禪門の開示悟入といふのもそれとおなじ趣きがあるので、もと〳〵自己本具の佛性を輝かすといふのであるから、憤然として自ら砥礪し向上するのでなくては能く眞悟徹底を望まれない。師家の親切な誘掖は外からその進路を啓發して向上の進歩に加速度を與へてそれを完成せしむるに外ならない。若し自ら憤を發することなく精進純一ならざる者は、如何に叮嚀な善知識の開示を受くるとも畢に了悟證入の期はなからう。禪門に大奮心を要すと云つて參禪の一要件とするのがそれである。

雪峰義存禪師は有名な大善知識であつたが、その修行は實に苦心慘憺たるものであつた。三到投子九至洞山と云つて投子禪師の所には三たび洞山大師の許には九たび往つて熱心に參叩工夫したが省悟を得なかつた。けれどもいよ〳〵大奮心を以て行脚歷參をつゞけ寸刻も止むときはなかつた。常に兄弟弟子の巖頭と伴れだつて歩いてゐたが、ある日行き暮れて、とある民家に一泊を請うた。利根で夙に悟道を得てゐた巖頭は、床に就くと旅の疲れで直に深い眠りに落ちたが、道果を熱望して奮進しつゝある雪峰はさうした旅の夜の目も安きを得られなかつた。夜更けて巖頭が眼を覺まして見ると雪峰は兀然端坐して沈思工夫を凝らして居る。巖頭はその機熟せりと見て、「おい何をそんなに苦しんで居る。一體どんな工夫をして居るのか」と穿鑿を始めた。雪峰は從來洞山や投子やその他諸方に歷參して來た事實を一々擧示し、また經論の文句を引いて斯う〳〵と所解を述べた。巖頭は一言にそれらを斥けて「人から聞いた、經文

で見た、といふばかりではそれは人の佛法、經文の道理で自分のものは一つもないではないか、直に自己胸中より流出し來つて蓋天蓋地なるを要する」と唱破した。之れを聞いたとき、凝然として練心の頂點に達してゐた雪峰は夢から覺めたやうにハッと自己の本面目に撞着することを得た。

遠江の瑞應寺に長沙和尚といふがあつた。白隱禪師の道望を慕うて毎年臘八接心には必ず駿河まで出かけて行つて熱心に參禪するのであつた。臘八接心といふのは、釋尊が十二月八日に成道したのを紀念するといつたやうな坐禪の會で、十二月に入れば一日から八日の曉天まで、晝夜を通して大衆一堂に坐禪して各々自己の心地を明めようとするのである。ところが長沙は毎年同じことを繰り返へしてゐたが空しく駿遠の間を往來するのみで未だ入處を得なかつた。白隱はこれを憐んである年の臘八に齋終つて長沙が辭して歸らうとするとき故らに激勵して言つた。「貴樣は毎年臘八になれば出て來て終れば歸つてゆく、丁度鴨が寒くなれば來て溫くなれば歸つてゆくやうなことをして居る。一體何をしに來るのぢや、往つたり來たり今までに幾足の草鞋を踏み破つたか。老僧が這裡にはそんな閑人を容れる餘地はない。來年からはもう來るな」長沙はこゝに於いて激憤を發し深く決心した。「自分だつて堂々たる男子だ、這回白隱の證明を得ずんば生きて再び故郷に歸るまい」と、自ら七日間を限つて海濱の網小屋に至り、食はず飲まず寢ずに坐禪工夫を始めた。滿期の第七日の夜が明けた。矢張り何の得るところもない。最うこれまでだ、と下駄を脱ぎ捨て波打際目がけて走り寄つた。あはや、身を躍らして魔のやうに暴れまはる狂瀾の一呑みに委せんとする刹那、金線サッと水天髣髴の際に投げかけて一面の紅彩が波頭と映發し、金蛇銀蛇を掣する日の出の光景が眸を射たとき、廓然として無垢世界に超入することを得た。溢るゝ慶快の情を滿面に湛へて松蔭寺へ引つ返した。白隱は滿足の笑みを浮べて迎へ入れ「汝徹せり」と允可を與へた。

これらは謂ふところの大奮心を以て精神辨道した例の一二に過ぎないが、その他古

徳先賢みなこの大奮心を以て不惜身命に修證の一路を辿られざるはない。是れは苟も眞に參禪に志す者の根本精神であらねばならぬ。而してこゝに擧げる宜詳禪尼の如きは能くこの清範を學び得た一人であつた。

諱は宜詳、號を眞宗といつた。俗姓は中島氏、播州の人である。佛法歸依の志の篤かつた彼れの父母は網干の龍門寺默禪和尚の許に彼女を送つて得度受戒せしめた。その時彼女は未だ僅に十歳であつた。當り前なら人形を抱へたりお手玉取つたり、小猫のやうに、嬉々として戯れ遊ぶに餘念ない幼女である。クル〳〵とその小さな頭を圓めて、赤い袗を取つた黒い麻衣を着て、チョコナンと人形を据ゑたやうに佛前に坐つて、鸚鵡のやうに習つた御經の文句を黄ろい聲で讀み上げるその小さな世捨人のいぢらしい姿が、如何に參詣の婆々達をホロリとさせたであらう。この何も知らずにゐる小比丘尼が、後に立派な尼僧叢林の宗師家にならうとは當時誰も想はなかつた。彼は漸く長ずるに及んで、その出家の意義や價値を自覺するやうになつた。そして禪宗の特色たる雲水行脚に出て諸方の有道を歴訪した。中にも大雲、愚溪、隱山等の宗匠に親參して遂に本來自己の安樂境を見出すを得た。

昔、支那五臺山の秘魔窟に一人の道人が居た。木で作らへた一本の刺叉を持つてゐて、參禪の僧が來ると突如それで僧の首を狹んで斯う問ふのであつた。「どんな惡魔があつてお前を出家さしたのか。どんな惡魔があつてお前を行脚さしたのか。道ひ得るも此の叉木の下に死なねばならぬ、道ひ得ざるも此の叉木の下に死なねばならぬ。サア其麼ぢや道つて見ろ、道つて見ろ」行く者一人として對への出來るものがなかつた。ひとり、藿山の景通は、往くや否や彼が毒手を弄するに先んじて敏早く道人の懷に飛び込んで彼の趺坐してゐるその上に坐つた。道人は何も言はずに藿山の背中を三たび撫でた。藿山はッと立つて「三千里外に我を賺し來れ」と言ひ棄てゝそのまゝ走つて出で去つた。

出家が出家としての本分の事を知り、行脚若し行脚の本義を明め得るならば、能事

了つて遺憾なきものである。が、事實、世上滔々として、殆どこゝに於て沒交渉であること、彼の秘魔道人が叉下に苦む僧の類である。單に出家とのみいふべきでない。徹底的に、政治家にして政治家の本領を識り、學者にして學者の天職を盡し、軍人にして軍人の本分を辱しめず、農工商各〻農工商の本分を完うするもの現代社會によく幾人か得られよう。

出家の身で出家の本分を自覺した宜詳は、恐らく、秘魔道人をして再來せしむるとも、よく其辛辣な作略に對して彼の藿山を學び得るだけの機鋒があつたらう。あるとき、彼自ら考へた。「自分は女流とはいへ、既に勝緣によつて今大乘の佛弟子となることを得た。この身今生に度せずして何れの世をか俟たう、誓つて佛道を成じ佛恩に酬いねばならぬ」と、こゝに大憤心を發して袈裟行李を背に行脚の途に上つた。

東西周歷のうち、雲山和尙の家風を慕ひ之れを訪うて參叩すること三年、得るところなくて辭し去り、更に豐後國永安寺に愚溪禪師を禮して五六年參隨した。この間辨

道日夜倦むところなく、その純一の精進は他の同參の衲僧達をして驚歎せしめたほどであつた。が、まだ出身の活路を見出すことが出來なかつた。一先づ愚溪を辭して復た去來を雲水に任せた。その頃愚溪と同參で隱山禪師といふがあつた、盛に白隱正傳の門風を煽揚すると聞いて、往いて深瀨の堅相寺に相見した。

隱山は白隱の神足峩山によつて徹悟した高德で、家風頗る峻嚴、道場では、日夕喝は奔雷の如く振ひ棒は雨點の如く行はれ、怒罵呵讓少しも假借することなく誨勵された。それでも風を望んで會下に投ずるもの常に場に溢れた。それらの參徒は皆何れも熾烈な求道の志を以て誓つて眞乘を得んが爲めに寢食を忘るゝといふ獅子兒のみであつた。この間に交つた宜詳の猛烈な從來の參禪振りは更に猛烈を加へざるを得なかつた。所謂大奮心はそこに現はれた。隱山の毒手に觸れて日夜夢寢にも間斷なき工夫を運らすのであつたが、機緣未だ純熟せず入頭の邊に逍遙することは容易に出來なかつた。彼は常不臥で脇を席につけずに坐禪三昧をつゞけた。さうした修行が三年五年七

年十年とつゞいたが依然として漆桶を打破することが出來なかつた。が、彼はいよ〳〵激憤を發してます〳〵勇猛に參學工夫を懈らなかつた。それが十三年つゞいた。十三年の後、一夜、隱山の提嘶を受けて豁然として本地の風光を歸觀した。鳥の雛が孵化するのは中から雛が啐くのと外から親鳥が啄むのと同時だといふ、多年黑漆昆崑の卵の中にゐた宜詳は、今や機熟して啐啄同時、師資證契即通して正に金翅鳥垂雲の翼を羽打つて天地を震憾するの意氣を振ふ第一人となつたのである。

宜詳既に隱山に法を得てのちは故國播州に歸り、不詳菴に住して悟後の大用を現はした。尼衆の來つて參隨するもの二百を以て數へられ、その圓寂文政十年八月に至るまで二十年の久しい間行道殆ど一日の如くであつたといふ。法席の盛なること當時に於ける堂々善知識の門風を凌駕するの勢あつたものと謂はれて居る。如何に彼が大力量の禪尼であつたかは、高邁英俊を以て稱せられた隱山がかつて次の如き偈を贈つて居るのに見ても想見される。

一從參我禪。恰十有三年。夕究譜訛則。朝思難透緣。鐵磨非敢後。
無著又何前。猶有重關在。再來喫老拳。

こゝにいふ鐵磨と無著は共に支那の昔の尼僧で亦悟道有力を以て稱せられて居るものである。煩はしいがこゝに一例を擧げてその禪機を窺ふの資としよう。

公案に「潙山劉鐵磨」の一則がある。劉鐵磨は即ち今いふ鐵磨のことである。性は劉氏、潙山の近傍に庵を結んでゐた老比丘尼で、常に潙山の靈祐禪師に參じついに徹底大悟を得た。その機鋒が非常に鋭くて鐵の臼のやうだといふので劉鐵磨と字せられた。あるとき潙山に往くと靈祐禪師は先づ一拶を與へて、「老牸牛來たか」と言つた。潙山は死んだら山下の檀家へ一頭の水牯牛となつて生れると自ら言つてゐた。自ら牡牛だと云つて居るのが今比丘尼を見て牝牛と呼んだのも面白い、劉鐵磨の應對がまた面白い、「明日五臺山に大齋會があるといふが和尚さんお出でか」向ふが來たか、と言つたのに此方は、行くか、とやつた。南山に皷を打てば北山に舞を作す、といつたやう

な趣である。潙山和尚はそのまゝ其處へ身を延ばして長々と臥た。と、劉鐵磨は何も言はずに直に出て行つて了つた。行くかと言はれた和尚が牛のやうに其處へ臥たのは何の意志か。來たかと言はれた比丘尼がスウッと出て行つて了つたのは何の心行か、一段の眞風能く筆の描き成すべきところでない。

隱山は、宜詳の境涯を以てかうした古の老比丘尼と相伍して敢てその後に居らざるものとしたのである。宜詳若し當時潙山に在つたならば、或は彼の老牸牛の鼻づらを執つて引つ張り廻したかも知れない。更に彼の水牯牛の尻こぶたに一鞭を擬したかも知れない。

喘哉拙郎君。　巧妙無人識。　打破鳳林關。　着靴水上立。
喘哉巧女兒。　攪梭不解織。　看他鬪鷄人。　水牛也不識。

——首山省念禪師

眞の出家兒

月潭老人の三種坊主——佛の字義——大乘佛敎徒の理想——宜詳と見泥——誠拙和尚の風骨
——鉗鎚熱鐵を打つ——向上更に向下——大拙の道風に接す——綿密高雅の風儀

見泥尼

その門下に、山本義祐、畔上楳仙、西有穆山など近代洞門の巨匠たる諸禪師を輩出した月潭和尚は、見識高邁、家風嚴正を以て聞えた宗師家であつた。常に參徒に示して斯う言はれた。「坊主に三通りある。第一は學人を接得する者、第二は伽藍を維持する者。第三は飯袋衣袈の徒である。苟も釋迦の兒孫たる者は眞の覺りを以て伽藍とし、學人を接して同じく覺りを得しめ、以て佛祖の慧命を相續せしめなければならぬ。それが眞の大報恩である、飯袋衣袈の徒で、ほんの看板に身を法衣に包み徒らに飯を食つて生きて居るだけといふ徒輩は佛祖の罪人である」と、今の世の出家兒、この第三類を以て數へられるべき徒輩で溢れてゐるではあるまいか。眞の意味に於ける第二類の坊主もよく幾人か得られよう。況して第一類の理想的な正師家に至つてはまことに尠

いと謂はねばなるまい。

自覺々他覺行圓滿は佛の字の意義である。即ち自ら眞理を覺り、自ら覺つたやうにまた他をも覺らしめ、さうしてその覺つた理を體現する、この境地に到つたものに名けて佛といふのである。佛の意義が斯うである以上、學佛者たるものは亦之れを以て理想としなければならない。それは出家ばかりではない、世間在俗の信男信女もおなじく、自利を圖ると同時に利他を忘れてはならない。二利圓滿は實に大乘佛教徒の理想で、またそれが人間倫理の根源であらねばならない。況して佛法僧三寶の一に處る僧の身として、徒に所謂飯袋衣袈裟の徒として佛祖の罪人となる如きは言語道斷である。檀越の信施を貪り逸居してたゞ造糞の爲めに日を送るといふならば、日一日その罪を積み重ねるばかりである。そんな坊主どもは片端から法衣を剝ぎ取つて精舍を趕ひ出し、何になりとも勞役に驅使するがよからう。それが法の爲めでもまた彼らの爲めではないか。

見泥は一比丘尼である。而もその生涯は末世の賣僧どもをして愧死せしむるに充分な行實を遺して居る、よく大乘の出家としての理想を實現して居る、月潭和尚の所謂第一類に列せらるべき一人で、前に擧げた宜詳尼とは伯仲として見らるべき尼衆中の好師家であつた。

諱は見泥、號を智水といつた。京都烏丸八木氏の女である。夙に出家學道の如何なるものであるべきかに眞面目な考を起し、誠拙和尚の爐鞴に入つて專一に工夫鍛錬した。

誠拙和尚は近世臨濟下の英傑で、鎌倉の圓覺寺、京都の相國寺の董主であつたが、まだ雛僧で伊豫の宇和島佛海寺にゐた頃、藩主伊達侯があるとき肩を打たしながら「小僧シッかり打てよ今度江戸へ往つたときには立派な法衣を買つて來てやるぞ」と戲れて言つたが、その後江戸から歸つたとき法衣を買つて來なかつたので、「武士に似合はぬ二言の奴」と、殿樣の頭にポカンと一つ小さい拳固を見舞つた。幼より高邁峻

烈の氣風を帶びてゐたのである。圓覺寺に出世してから、樓門の改築費にと江戸の豪商白木屋某が百兩を寄進した。誠拙は「さうか」と云つたゞけであつた。「和尚一言の謝辭ぐらゐあつてもよからう」と云ふと突如粥を煮てゐた鍋の蓋を取つて某に打ちつけ「貴樣が功德を積むのに老僧がお禮を言ふことがあるか」と一喝した。ともすれば財力に誇りたがる富豪の鼻柱を挫し折つた痛快な逸話である。

これら一二の例に見ても、誠拙和尚が日常如何に惡辣手段を弄して學人を鉗鎚したかは思ひ半ばに過ぐる者がある。見泥尼は特にさうした家風を慕うて長年參隨した。彼女が如何に單々の工夫を凝らして勇猛に精進したかも亦想像される。僅かに前めば捉住へられ、口を開かうとすればそのまゝ托開られ、何が何だかわからないで引き下がることもあつた。更に鋭氣を鼓して一段の工夫を運らし、聊か省悟を得たと思つて喜んで師の室に往くと、未だ關を跨がないうちに痛棒を喫はされて眼が眩んだやうなこともあつた。けれども彼は曾て倦怠の色なくいよ〳〵熱心に參禪した。熱し切つた鐵に名工の鉗鎚がつゞけ打ちに下される、凄まじい火花の散る光景である。吹毛の劍はさうして鍛へ上げられた。

見泥既に誠拙の道を得て後は都の西、川勝寺村に草庵を結んで西來寺と號し、參學後進の尼衆を集めて接化を事とした。彼が從來、上に對つて求めた所以のもの、今は下に向つての化導となつて現はれた。これまで慘憺たる自覺の一路を辿つたのが、今は廣大なる覺他の慈門となつて開かれた。彼はこの大乘佛徒の理想を實現せんが爲めに、整然嚴肅な淸規法條を設けてよく一會をして和合せしめ眞に淨淨海衆の面目を保つた。さうして參徒の機根をよく察して或は公案を拈提し、或は粗錄を習讀し、諄々として老婆親切を盡すのであつた。

見泥はまた當時心華庵に住してゐた大拙禪師の道風を欽慕して、講筵ある毎に參徒を率ゐて必ず出かけて往つて聽問することを怠らなかつた。その徒みな木履を穿いて高く裳を褰げ、兩方の手首をチャンと組み合せて胸に當てる叉手と稱する禪苑の禮容

を整へ、如何にも安靜な、さうして嚴肅な態度で往來するのであつた。觀る者何れもその綿密高雅な風儀を感稱したといふことである。威儀即佛法とさへ說かれてある。內修まれば外必ず整ふものである。彼の禪和子としてまた女流としての奧床しい風格が偲ばれる。彼は所謂眞の出家兒であつた。

天保十三年五月二十一日泊然として蛻脫した。年は六十八であつた。

設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも、樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし。

——道元禪師

大信根

智敎尼

投子牛在の話頭——人々本具の牛——心裏面の主人公——襤褸に金貨を裹む——佛の語と經の文——自信力自重心——禪學の三要件——水月庵主——道を大觀禪師に得——淨門の尼純圓を度取す

投子山の大同禪師の許にあるとき一人の老婆が訪ねて往つて斯ういつた。「私の家で牛を失くしたんですが今何處に居るか、和尙さん一つ占つて見て下され」禪師は「おい婆さん」と呼んだ。老婆が「はい」と返事をした。と、禪師は「それ牛が居たぢやないか、と云つた。「成る程、これはどうも有り難うございました」と、老婆は喜んで歸つて往つた。

「おい」と呼んだら「はい」と應へた。「それ牛が居た」とは宛で何のことかわからないやうな問答だ。が、それで問者も答者もチヤンと幽蓋合するやうに要領を得て了つた。全體婆さんが牛といつたのは何か、角の生えたモーと鳴く牛でないことは勿論で

ある。人々誰でもこの牛を一疋づゝ有つて居る。何時でも何人でも「おい」と呼べば「はい」と應へる。それが本具の牛だ。本具のものでありながら皆知らずにゐる。參禪學道といふもこの牛を見出さんが爲めに外ならぬ。ところがなか〳〵容易に見出されないで彼方か此分かと四方八方の岐路に迷ひ込んで彷徨うて居る。焉ぞ知らん目指す所の牛は自家の牛小舍に便々として横臥して居る。散々駈け廻はつて尋ねあぐんだ頃ヒョックリ自分の本家郷に歸つて來て見ると、「何あんだこゝにゐたのか」といつたやうな調子である。今の老婆は餘程境界の出來てゐたものと見える、投子の一言の案内で岐路に迷はずに直に牛を見出した。

牛といふから語が少し奇になつて解らなくなるといふなら、本當は佛性だ。一切衆生悉有佛性、人々佛と異はない本性を有つて居る。中江藤樹が「心裏面に常住不息の良知の主人公御座候。この君に對面なされ工夫御勤め候へば何時となく浮氣除き申すべく候」と言つたその心裏面の主人公である。その主人公は天下一品、何人にも一歩も讓らぬ最尊最貴のものである。それを佛性といつてたゞ佛のみが有つてる特殊なものゝやうにおもひ、自分はまことにつまらない凡夫で永刼にも浮ばれないものゝやうに思ふのは飛んだ見當違ひの遠慮である。番頭手代が跋扈して主人公を幽閉して居る貌である。

いくら襤褸の財布に入れても金貨は金貨である。如何に迷妄の情を以て昧ましたからとて佛性、心の奥の主人公には變りはない。襤褸から外に出せば燦然として人の目を奪ふ金貨のやうに、何人でも一たび妄情を拂ひ去れば佛と毫も異はらない本性の靈光が輝きわたる。この身このまゝ佛である。であるから佛は成道の初めに於いて「始めて知る衆生本來成佛なることを」と歎ぜられた。梵網經には「我は是れ已に成じたる佛、汝は是れ當に成ずべき佛」と説かれた。大覺眼中には迷悟凡聖の差別なく、本來同一佛性を離れたものでない。禪の修行はこの自己本來佛であるといふことを徹悟するに在ることは前にも屢〻言つた。人は自ら自らをよく知るときはそこに自信が生ず

る。今まで自分がつまらない淺ましい凡夫であつたと見縊つてゐたのが、本來佛と同等なものと知れゝば、そこに强い自信力が生じ自重心を有つやうになるべきは當然であらねばならない。この自重自信あつて始めて佛道が成就される、禪の妙用も現前される。この信念――自性本來佛と異つたものでないとの信念――を確立するのを大信根と名ける、前に政女の條下で言つた大疑行と、宜詳尼のところで言つた大奮心と、この大信根とは禪學に志す者の缺くべからざる三要件とせられるのである。

天保の頃、河内國の八幡の邑に水月菴といふ些々やかな草庵を結んで、行法綿密な一人の禪尼が住んでゐた。名は智敎と言つたが、もと何處の國のどういふ素性の人であつたかは明かでない。

當時、南禪寺僧堂の主董で、大觀禪師といふ高德があつた。大觀は十六歳で始めて白隱和尙の神足なる東嶺和尙に見え、隨侍して駿遠の間を往來すること五六年であつたが、自ら誓つて「われ大事を明めなければ頭を擧げて富士山を仰ぎ見ない」といつて殆ど身を捨てゝ研鑽苦攻し、十九歳でつひに大悟を得て東嶺の允可を受けた、といふほどの大器利根の人であつた。智敎尼はこの善知識に相見して參禪學道したのである。かの投子に參じた老婆は一言の下に牛の行衛を合點したのであつたが誰にもさういふわけにゆくものでない。知敎には容易に見當がつかなかつたが、いよ〳〵熱心に怠らず探究をつゞけた。結果、つひに恍然として無碍の一路に撞入することが出來た。悟道旨に合つて大觀禪師の證明を得たのである。

智敎は既に大觀の道を得て本來成佛の大信根に安立して後は、河内に退いて靜寂な水月庵の水光月色に飽參の襟懷を長養しながら、分に應じて附近有緣の檀信に法味を施し頒つことを怠らなかつた。

かつて京都にゐた頃、淨土門の尼僧で純圓といふものが居つた。多少の學識があつて和漢の書にも通じ、和歌も善く作つた。屢く檀信徒の家で知敎と出會ふことがあつたが、ともすれば純圓はその學問を鼻にかけたがる風を見せるのであつた。あるとき

ある檀越の葬送の際にまた二人は一處に落ち合つた。話の序に例の學問自慢が始つた。純圓は得意になつて和漢書の文を引いたり、和歌を持ち出したりしてひとり喋り立てた。さうして智敎を屈服せしめようとしたのである。智敎は固く唇を結んで相手に存分喋らしてゐたが、語の途切れるのを待つて、「お待ちなされ、本を讀んだり歌を詠むことが出家の本業ではござんすまい。出家にはそんなことよりも大事なことがある筈。一つ訊ねますが、今日お互に經文を誦んで死人に回向したことぢやが、あれで亡靈は疑ひなう成佛出來るやらどうやら、それをあんたはどう思はつしやる」と、一本詰問の矢を放つた、急所を射られて今まで囀つてゐた純圓は、鷹に襲はれた藪雀のやうにキウの音も出なかつた。

衆生本來成佛の理を明めてゐた智敎には亡靈成佛を得るかどうかの問題は恐らく何でもなかつたらう。世智辯聰を事として所謂自家の牛の所在に就いて曾て考へ及ばなかつた純圓の耳には確き自信ある智敎の一語が霹靂のやうに響いたであらう。限りある人の頭から流れ出る知識の泉は赫耀たる佛性の慧日に慘めに乾し上げられた。瑣々たる詩文の末の技能は本有の靈光の前には醜く色褪せて散り萎む幻滅の花に過ぎなかつた。純圓の矜恃としてゐたところのものは沙上の樓閣のやうに土臺から衝き崩されて空になつてしまつた。

純圓はこの時から衣を改めて禪宗に歸し、智敎の弟子となつて見性成佛の新たなる修行に心を傾けた。

智敎は大に悅んで別傳の宗旨を日夜に啓示した。のちその草庵を純圓に讓つて後を襲がせたと。

佛法に入る者、信心の手あれば道德の寶を採取す。若し信心なくんば空しく所得なし。

——宗鏡錄

實參實究

純圓尼

夙に安心を求む――如何と問はざれば如何と答ふる能はず――師の示寂――深き考と强き決心――智敎の啓發に逢ふ――靈光發耀――大觀禪師の點檢――悟後の參詳――鬼大拇――實參實究二十年――永平廣錄の文――慈大の志

純圓、諱は祖純といつた。京都の生れで、近く明治元年八月十五日まで世にゐた人である。その出家はまだ頑是ない十歳のときであつた。天性慧しく、讀書くことには好んで心魄を打ち込むといふ風であつた、で、早くからその才能は往々大人を驚歎せしむることもあつた。得度を受けたのは淨土宗であつたので、かれは先づ淨土宗に關する書物を手當り次第に涉獵した。そして往生安心などの文句を見る毎に心ひそかに疑を懷いて、未熟な頭で何とか解決を得たいものだと頻りに脩練を勗めるのであつた。それがまだかれが十三四歳の頃であつた。

如何々々と問ふにあらざれば如何々々と答ふる能はず、とは禪林の師家が常に口にする語である。求めよ、さらば與へられん、叩けよ、さらば開かれん、とは屢く宗敎家の啓示するところである。前に、禪の修行には大疑行を要するといつたのもこゝのことである。自力門の一面に立つていふならば疑の對は信、否、疑そのものが信である。求むるところあつて未だ得られなければ必ず疑なきを得ない、疑團凝つて絕點に達したとき、そのまゝそれが信となる。曾て疑問なき解答はあり得ない、大なる疑問は大なる信仰に到達する所以である。若し始めより人生のどこにも疑問がないならば、哲學もない、宗敎もない、安心も立命も言ひ得らるべきでない。頴悟なる純圓は夙く既にこゝに第一歩を踏み出したのである。

かれが十五歳の春、その得度の師が頓に遷化した。かれは懸崖を攀ぢ上らうとして一條の蔦葛を手繰つたのが、足わづかに地を離れようとする途端にプツリと切れて眞倒樣に打仆れたやうに、殆ど絕望的に慟き悲んだ。が、かれは、徒に悲んで傷るといふ弱い人間ではなかつた、最初に取り縋つた蔓は切斷したが、仆れて起きて更に如何にして

その懸崖を辿るべきかの路を求めることを忘れなかつた。杜とも杖とも頼みにしてゐた師の示寂に遇うたかれは、その身邊を取り卷いた灰色の運命の中に一道の光明を求めて活路を開かうと跪いた。人生無常變遷の事實を面りしみ〳〵と味つたかれは、そこに安心解脱の道を見出さうとするの念いよ〳〵切實となつたのである。

ある日慨然として「深く考へ、そして强い決心をした。「自分はたとひ女子の身であるとはいへ、すでに勝緣によつて出世間に生きるべき僧の形を具へて居る。僧でありながら安心の道を得ないといふのは愧づべき極みである。そして今や吾が師は在しまさぬ、こゝに空しく日を送るとも詮ないことである、他處へ往つて善き師を求めたら必ずいつか志を遂げることが出來よう」と、その年、孤笈瓢然として舊巷を立ち出で雲の如く水の如く身を悠々たる去來に委せることにした。所謂大奮心の閃きがそこに見えるではないか。

のち聖護院のほとりに僑居を定め、專ら持戒看經して行ひ澄ましてゐた。八幡の智敎尼と出會つたのはその頃のことであつた。智敎の一問に口を緘んだ純圓は素直に我慢の城壁を根柢から打破して直に衣を改めてその弟子となつた。夙に大疑行と大奮心とを以て只管安心の道を希求して已まなかつたかれの熱誠は、求むる道の爲めに私情の棄て難きをサラリと放下した。今まで求めて未だ安心を得られなかつた他力淨土の法を振りすて、そこに即身是佛の大信根の萠芽を角み出したのである。

智敎は叮嚀親切に誨勵した。純圓は更に憤を發して、日夜寢食を忘れて練心工夫した。擧手投足、動にも靜にも寸刻も間斷なき精進をつゞけた。夜の幕が靜かに取り除かれて清新の大氣の裏に自然萬象が生動し初める朝まだきのことであつた、かれはひとり夜來工夫のつゞきの恍惚たる氣分で井戸端に下り立つた。釣瓶を執つて水を汲まうとして、スル〳〵と井戸の中に落した、釣瓶の底がバタンと水に當つて一種の餘韻が耳の底に消え入るとき、忽然として省悟するところがあつた。黑漆の眞疑團は微塵に粉碎されて雲散霧消し、やがてそこに彩霞を破つて現はれた旭日が第一の金光をサ

ッと天の一方に射したそれのやうに、本有の靈光が爽快の胸下に輝きわたつた。

智敎は、早速南禪寺に大觀禪師を訪うて點檢を請ふやうに、と指示した。純圓が往つて相見したとき大觀は爲めに數段の古人悟道の因緣を擧げて試驗した、純圓は一々見解を呈露した、そしてそれからは毎日晨に暮れに、南禪寺に參趨していよ〳〵純一の參叩を懈らなかつた。

のちに智敎の讓りを受けて八幡の水月庵に住した。當時八幡の圓福寺には矢張り臨濟下の高德、海山和尙といふが住持で居た。また海山和尙の同參なる石應和尙といふのが錫を止めて化導を助けてゐた。海山は溫乎玉の如き好師家と謂はれ、石應は外溫にして內剛、門墻孤峻を以て稱せられ、共に道風一世に高い善知識であつた。純圓はこの二老によつて參得するところが亦多かつた。のち更に相國寺の大拙禪師に見えた大拙は人と爲り簡默で威容儼然、その學徒を接するには手段惡辣を極めた。參徒のうちには崖を望んで逃げ出す者も少くなかつたといふほどで、世間では鬼大拙と謂つて喧傳されてゐた。熱烈な求道の精神に充ちた純圓は斯の道風を殊に欽慕した。そしていよ〳〵大奮心を振ひ起して專一に悟後の參詳を懈らなかつた。さうした純一な實參實究がちやうど二十年の久しい間つゞいた。さうしてつひに悉く古今の葛藤、東西の誦訛を定め、末後の牢關を透過して頂天立地底の本來自己の面目を了得した。眞乎徹底的にその最初の行願を完成したのである。

永平廣錄に「山に上らば須く頂に到るべし、海に入らば須く底に到るべし。山に上つて頂に到らずんば宇宙の廣寬を知らず、海に入つて底に到らずんば滄溟の淺深を知らず」とある。參禪は須く徹底なるべきを示されたものである。古人もみな、小悟大悟幾十返を繰り返して而もいよ〳〵倦むことなく怠ることなく精進せられて居る。もと本證妙修の眞諦は、譬へば圓の周圍を廻るやうなものである。終始を劃らるべきでない。學道の者は宜しく慕大の志を以て小成に安んずることなく、よし省悟を得ることあつても、更に一番悟後の大修行をつゞけなければならない。況して未

悟未證の末學をやだ。

純圓の徹底眞悟を期して猛進した終始の態度は、まさに後昆の清範たるべきものと謂ふことが出來る。

得力に大小ありて、小悟却つて大悟の妨となる。

小悟を捨てゝ取らざれば大悟必ず得、小悟を取りて捨てざれば大悟必ず捨たる。譬へば人の小利を貪れば大利を得ざるが如し。

——快馬鞭

自家の珍寶　歌女

先生と古本屋——寶を懷いて寶を知らず——始めて純圓の指示を受く——最初の光明——純一の心行——一休和尚の修行時代——釋尊の難行苦行——本地の風光に接す——大觀禪師に見ゆ——不幸中無限の幸福

學者先生たちは、丁度世の若い女共が衣裳髪飾を欲しがるやうに、書物を愛好して無暗に集めるものだ。私の知つてる先生にもそんなのがある。散歩の序にもチョッと古本屋の店頭を覗いて見る、そして吾々なら無代でも御免蒙りたいやうな、反古同樣のものを、これはよい鳥ござんなれ、とホク〳〵ものゝ本屋のおやぢがいふまゝに、「ウムこれは一寸面白い本だ」と馬鹿げた代價を置いて持つて歸る。一寸面白い本には違ひない、しかし、其の値段が馬鹿々々しい。女共が、欲しいと思つた帶や衣物に眼が眩むやうに、先生は、本とさへいへば眼がなくなる。ところが、その眼がないといふのは、先生の方は金には眼をくれないが本そのものには明かに眼があるのだし、本屋

の方は本よりも金にのみ眼をつけてゐるのである。であるから時によると斯んなことがある。本屋のおやぢは、どこかで紙屑の値段で買つて來た古ぼけた本を店の隅つこに「より取り五錢」の札をつけて酷たらしく捨てたやうに拋り出して置く、先生は何氣なくそれに眼を留めて例のやうに「これは一寸面白い本だ」と買つて來る。一寸面白いどころか、それは得がたい天下の珍本なのだ、先生は飛んだ掘出しものをしたわけである。本屋の店頭に虐待されて塵に埋もつてゐた古本が、忽ちにして桐の箱に秘藏されて先生の書齋に飾られ、やがてそれが、先生の腦漿となり或は筆に或は舌に廣く人を資け世を益することになる。

私達の心の奥には何人も平等に一の佛性といふ珍寶を持つてゐる。が、それを煩惱妄執の汚れに掩うて、自分はたゞつまらない凡夫だ罪の兒だとして、向上の一路を求めようとしないのは、丁度古本屋の主人が天下の珍本と知らずに塵だらけにして、隅つこにそれを押し込んで置くやうなものである、が貴い寶だと知れば何人もそのまゝに捨てゝは置かれない。人が何らかの動機から自覺し、若しくは善知識の誘導によつて自己を明めんとする信念の起る第一歩は、實にこの自分が懷ける佛性の寶を、寶と氣がつくところに在る。

もと〳〵それが自分の本具のものである、そしてそれが萬人一樣で、佛に在つても衆生に在つても毫も異らぬ寶である。故に眞にこの寶を堀り出さうとの信念を起す以上は、男でも女でも年寄でも子供でも何人にも出來なければならない。また堀り出したその寶は、身分の貴賤、職業の如何に拘らず、みな一樣に大光明を放つ筈である、聖人も凡夫もない、各人そのまゝ佛祖と同道同行の境界に入るのである。禪家に「心と佛と衆生と是の三は差別なし」とか「唯一乘法有り二も無く亦三もなし」とかいふ經文の句を屢く用ゐて學人を啓發するのも、この絶對平等なる本具の一寶を搜得せしめようとする標月指に外ならない。

京都の商家奈良屋某の女に歌女といふがあつた。幼少から聰慧な、そして沈着いた、淑やかな性であつた。年十五のとき、かの水月庵純圓禪尼に出會つて始めて禪要を聞いた。純圓は、自分が智敎尼の詰問に逢うて激憤を發し、佛道修行はたゞ自己を明めるに在るの道理を知つて、それより南禪寺大觀和尙に相見して專ら練心の工夫をしたといふ自分の修行の徑路を物語り、そのうちに巧みに直指人心見性成佛の玄旨を說いた。得法の禪尼が接得は諄々として老婆親切を極めたものであつた。上智下愚、利人鈍者を擇ばず、平等に佛地に超入し得べき佛祖の廣大な慈門がソコに開かれた。歌女は恍然として導かるゝまゝに門內に撞入した。

純圓に啓發された歌女は始めて自分に本具の佛性ある道理を知つた。今までは取るに足らぬ凡夫、殊に罪業深重の女人の身、佛とは遠い〳〵彼方の岸に在す貴き方とばかり思つてゐた迷霧は隈なく晴れた。「ほとけとて誰が結びけんしら糸のしづのをだまき繰り返し見よ」こんがらがらつた妄念妄執の情緒を繰り返して見れば、凡夫とてたゞ繩なきに自ら縛してゐたおろかさよ、その糸の縺れのほどけたかたちがほとけか、と、そこに本來本法性天然自性心の根本信仰がパッとその最初の光明を閃かした。

彼女はそれから足しげく純圓を訪うた。事に感激し易い女性であるだけに、長者を信じてその言ふことを受け込み易い天眞純潔な少女であつただけに、彼女の參禪工夫は純一專念であつた。朝早く女の身だしなみで先づ式の如く鏡の前に坐わる、が、そのまゝ髮を梳き粉黛を施すことを忘れて、動かざる木像を据ゑ付けたやうに、凝乎と深い沈思冥想に陷ちるやうなことも珍しくなかつた。三度のうち一度の食事は廢して まで一室に閉ぢ籠つてゐるやうなことも幾度かあつた。夜更け人靜まつて後ひとり褥の上に兀坐して苦思呻吟するやうなことも屢くあつた。父母は非常に心配した。が年若き娘が禪に凝つてそれほどになつたのだとは氣がつかなかつた。世によくある、處女心の一途に想ひ初めた相手でもあつて切なる思慕の情を小さな胸に秘して居るのではあるまいか、などゝも推測していろ〳〵に探つて見るのであつたが、どうもさうい

ふわけでもないらしい。が兎に角、さういふ態では、心氣鬱結して病氣を惹き起すであらうとの恐れから、樣々に慰め賺かして芝居觀に連れ出さうとしたり、山水の勝景に氣を紛らす爲に誘き出さうとしたりするのであつたが、彼女は每時もそれらには耳を假さず、矢張り間斷なき潛思工夫をつゞけてゐた。

一休和尙といへば、瓢輕な、奔放な、洒脫な、まるで滑稽の權化のやうに直に吾々の頭に浮かんで來るが、それら圓轉滑脫の禪機は決して其の所由がなかつたのではない、彼が修行時代は實に苦楚慘憺たるものであつた。鬚髮蓬々、形容枯稿、面壁工夫に殆ど寢食を忘れて誓つて覺りを開かうとしてゐたとき、檀信の誰彼が、うら若い坊さんが戀の病に惱むのであるまいかと、早合點して密つと容子を探つて見ると、一休は筆を執つて「本來の面目坊がたち婆一目見しより戀とこそなれ」「我れのみか釋迦も達磨も阿羅漢もこの君ゆゑに身をやつしけり」と書きつけて示した、といふ話は口碑に傳へて誰も知るところである。實際釋迦を始めこの君ゆゑにうき身をやつして居る。

釋尊が、父王から種々の手段を以てその出家を思ひ留らさうとして提供された世間的快樂の總てを顧みず、貴き王位をも弊履の如く振り棄てゝこの道の爲めに一介の乞食坊主となつて難行苦行されたことも亦人のよく知るところである。痛切に人世觀に觸れ、熱烈な信仰の念に驅られて眞面目に道を求むる者に在つては、それが全生活中の最大問題である。その道を得て安心が出來るまでは、世間の總ゆる快樂慾望の如きものは全く注意を惹く條件とはならない。法を求め道を冀ふ者はそこまで純一な精神にならなければ眞の發心ではない、眞の修行ではない。

歌女は、諸緣を拋捨し萬事を休息していよ〳〵熱心に精進工夫をつゞけた。一夜深更に、坐して一身枯木の如く萬念死灰の如くにして深き禪那に定着した。四隣靜寂として萬象盡く夜の眠に落ち、心胸蕩々として我なく他なく、善惡の思ふべきもなく是非の管すべきものなく、山河大地もなく、洞然として迷へる自己もなければ悟るべき眞理もなき境地に到つて、廓然として本地の風光に接することを得た。從來暗昏々

裡に手を振り足を擧げて模索してゐた本有の寶を搜得して今や不昧の靈光十方に輝きわたつた。

夜の明けるのを待ち兼ねて、彼女はこの慶快に溢れた胸次を純圓の前に擧示した。身心を擧げてたゞ道の爲めにするといふ純圓は、隨喜の涙を落してその省悟を讃嘆した。そして直に伴れ立つて南禪寺に往つて大觀和尙に相見せしめた。大觀は數段の因緣を提起して仔細に點檢した、歌女はそれらを悉く明めることが出來た。

一少女の歌女は斯うして安心を得た。その後配偶を得て一家を齊理する身となつたが、良人は薄命の人で計畫することがいろ〳〵な事障の爲めにみな失敗に歸し、奈良屋の家運は頓に衰頽を來して一家は一時非常な悲境に陷つた。歌女は其の間に處してよく彌縫の策を講じたが、終に昔の奈良屋とすることが出來なかつた。しかしながら內面に動きなき安心を懷いてゐた彼女は、徒らに逆境に悲み歎いて措擧を失ふ世の婦女子とは決して同じではなかつた。よく盡すべきの人事を盡しく避くべからざる天命を待つものであつた。

彼女には二人の男と二人の女の子があつた。また母の薫化を受けて何れも禪の佛法に歸依すること篤く、敦厚な善男善女として近隣の稱揚するところであつた。世間的には幸福でなかつた歌女は、斯うした子女の間に限りなき法悅を味ひつゝ樂しい餘生を送り、明治の初年に七十餘歲で安然として世を辭した。

人は家を作りて居す、佛は人の身を宿とす。
家のうちに亭主常に居所あり、佛は人の心に住むなり。
——無雜假名法語

念佛の三昧

妙船尼

尼の人と爲り――念佛三昧を行ず――不思議の光明――一頭の古狐――白砂の奇特――奇特を尽く――不動の信念――眞の念佛行者――正法に不思議なし

法眼不角老人は江戸の俳壇で知られた一人であるが、妙船はその妹で、京橋槇河岸の松村半兵衛といふ人の母である。志貞良で、女としての道は萬事辨へざるはなく、夙に佛法を尊信して慈悲博愛の心に富んでゐた。

彼女が歸依したのは他力淨土の法門であつたが、晩年尼となつて妙船と稱する比には、いよ〳〵專念に念佛三昧を行ずるのであつた。ある日の夕暮、例ものやうに佛壇の前に坐して純一な信心で勤行を始めると、やがて佛壇の中に當つて煌々と光りを發するのを見た。ハテ不思議な、御厨子の扉の金箔か佛前の眞鍮の諸器具かに燭光の反射したのではないか、とよく眼を据ゑて見直したが、たしかにさうではない。そのうちに數點の耀きが頭上を掠めた、かと思ふとまた後の方からパッと赫灼の光明が佛間一面に照りわたつた。家内の者は、この奇瑞を面り見て、大におどろき且つ感じ入つてみな俯伏して拜んだ。評判は忽ち四隣に聞えた。その翌日から暮方になると大勢の人々が、不思議の光明を拜まうと、ぞろ〳〵妙船が勤行の一間に押し寄せて來て、口々に、妙船のありがたき信心の感得するところだと隨喜讃歎の辭を浴せかけるのであつた。

ところが本人の妙船ひとりは甚だ歎ばずして人々の讃辭を肯はず、自分は一向專念に念佛三昧を修するとはいへ、末世の、殊に罪深い女人の身として目前に佛の光明を感得すべしとは思ひもよらぬことである。これは恐らくわが信心を妨げようとする魔障の仕業であらう。つまり自分がまだ修行が足らぬからぢや、といよ〳〵淨信を專にして佛佛唱名をつゞけ、且つ、如來の廣大なる慈悲を以て早くこの不思議の光明を打ち消し玉へ、と心に念ずるのであつた。

と、ある夕方、妙船がいよ〳〵信心堅固に如來の悲願を念じ名號を唱へて居ると、

二階の一隅に當つて頻りに、ギイ〳〵ガタ〳〵とたゞならぬ物音がするので、子息を呼んで、急いで二階を檢べて見させると、思ひもかけぬ一頭の大きな古狐が、狼狽へながら窓から飛び出して何處ともなく消へ失せた。妙船、さればこそ、とそれよりいよ〳〵道心堅固に、ます〳〵念佛修行を專にするのであつた。

妙船の弟に與惣右衛門といふがあつた。若かつた頃放蕩して久しく家出してゐたのであるが、後に蓮糸といふ尼に就いて佛門に歸し、矢張り念佛唱行に餘念なかつた。ところがこの男にも一の奇特が現はれて、勤行のとき不思議に白色の砂子が粉雪のやうに雨るといふのであつた。俗人ばらは亦それを深く隨喜して老幼男女、與惣右衛門の許に參拜し、その砂子を爭ひ拾ひ取つて、守護袋に納めなどして有難がつてゐた。之れを聞いた妙船は矢張り頭を横に振つて、イヤ〳〵それは眞の念佛唱行ではない、と否定して、そして前のやうに如來を念じて、弟が念佛の不思議ゆゑに多くの男女の正しい信心を妨げ迷路に彷はすることを憐んで、早くかの奇特を取り除きたまへ、と一心に祈るのであつた。

その後、與惣右衛門が妙船の家に來たとき例ものやうに佛間に入つて一心に唱行を修したが、如何なるわけか砂子は一つも雨らなかつた。本人の與惣右衛門は勿論、參拜隨喜の大勢の男女一同も、これはどうしたことか、と驚き怪み且つ失望した。その時妙船は靜かに弟に向つて「念佛唱行に奇特奇瑞の現はれるは大に正道の邪魔であるゆゑ、如來に請ひ願うてさし止めて貰つたのだ。そなたが如何に念佛すとも今後決して塵一つの奇特も見ることはあるまい。そなたの信念はまだ青い〳〵、更に奮發して正しい修行をせられよ」と誡めるのであつた。與惣右衛門は大に慚愧して退いたが、その後は互に往來を絶つたといふことである。

古狐の仕業だの、白色の砂子が雨るのと、太だ妄誕不稽の信ずべからざるものであるとして、現代人の頭には直に否認されるやうな話頭であるが、凝り固つた心理的產物としてはいろ〳〵な不思議も在り得ることで、心理學者からは幻覺若しくは錯覺と

名づけたりなどして様々な説明も試みられる。が、こゝにはそれらの穿鑿は且らく措いて、要するに、他力門に依るにせよ、自力宗を奉ずるにせよ、その信念は飽くまで正しいもので、何ものにも動かされない確固たるものでなければならぬといふ意味を具體的に説明した例として見るならば、妙船の念佛三昧の如き、以て世の迷信者流のおろかな頭を掃蕩するに足るものと謂はねばならない。

殊に、唯心の淨土己身の彌陀と説く禪の立場からするならば、かの白隱に參じた老婆の如く、婆子の尻の穴からでも日夜斷えず大光明を放つ消息があつて、別に金箔の木像から光明を頂くことをするにも及ばないわけである。この自己即ち佛でふ大見識に立つて始めて確固たる大安心が得られるのである。他力門にしても、眞に彌陀如來の大光明に攝取された念佛三昧の行者に在つては、寢るも起きるも、往くも返るも擧手投足、觸處觸目、いつでも大光明裡を離れることはないのであるから、自己自身の身邊が矢張り不斷の光明を放つて居らねばならないわけで、別に俗物の肉眼を眩惑する不思議な光明を憧憬することを要しない筈である。故に禪では、若し坐禪觀法のとき、佛像を見たり光明を感じたり諸種の奇瑞の相が現はれるのは、みな道心未熟の致すところで、一の迷情妄想である。その時更に正心を呼び起しいよ〳〵奮進してそれら總ての眩惑を坐斷せねばならぬと敎ふるのである。かの水の上の羅漢に向つて怒目叱咤した黃檗の如く、釜の上に現はれた文殊を打ち据ゑた無着の如く、自己本來の光明蓋天蓋地なる前には、たとひ羅漢菩薩も亦許す所でないといふのが禪の向上一面の見識である。正法に不思議なしで、佛が最後の説法たる遺敎經の中にも「異を顯して衆を惑はすこと勿れ」と明かに説かれてある。故に若し妄りに奇特怪異を以て道を信じ法を説くものあらば、そは道に於て未だ半途に在る信心不決定のものか、でなければ法を賣り名利を事とする邪魔外道であらねばならない。

人々自ら古彌陀あり十二時中放過すること莫し。　——　鼓山晩錄

身心脱落

蓮月尼

姿色才操雙美――引續く不幸――尼となる――和歌を學ぶ――貞烈自ら顏容を毀ふ――陶器を鬻いで自活す――二利圓滿の行爲――家越の蓮月――伏見人形の本尊――禪の第一義諦――念佛の王三昧――脱落平安の生涯

尼蓮月、幼名は誠といひ、京都智恩院の廣間侍太田垣傳右衛門光古の女である。性質溫順で、才情に富み、容色また人に絶するの美人であつた。父は夙く近江國彦根の近藤某の子を養うて誠女の婿とした。やがて彼女は四人の子女の母となつたが、子供はみな早生して一人も育たなかつた。引き續く哀愁に涙の袖の乾く間もないところへ、良人も亦續いて子供たちの跡を追うた。水の泡、草の露より脆く頼みがたきこの人生の悲慘事を痛切に味うた彼女は、殆ど、一たび死して、また蘇るやうな精神的變化を見た。まだ二十歳ばかりの盛りの春を餞し、丈なす美髪もふつつりと、若き女の總ゆる榮幸に想を斷つて、俗塵の外に心靜に亡き人々の菩提を弔ふ尼となつた。

尼となつた彼女は蓮月と號し、千種有功の門に入つて和歌を學んでゐた。斯うして彼女は、敬虔なる宗教的觀念によつて禁ずべからざる哀々の情緒を整へ、閑寂な精神生活を以て世間有爲の榮幸に代へたのである。然るに、斯うした慘しい運命に遭逢し、斯うした潔い心事を懷いた彼女に對して、尙ほ彼女の周圍には理解なく同情なき迫害があつた。亡き良人や愛兒に對する貞節と恩愛との爲めに姿を變へた彼女は、元より微塵ばかりの飾氣を身につけなかつた、が、有つて生れた俊れた姿色は、如何に形相を變へても尙ほ人の眼を惹き人の心を動かすに充分であつた。爲めに種々の甘言美辭を以て言ひ寄る男が一人二人ではなかつた。蓮月はこれを心憂きことに思うて、みづから前齒を拔いてまで、その顏容の美を損ふことを企てた。さすがの煩さい痴者どもゝこの貞烈に感じないではゐられなかつた。彼れらはみな自ら慚ぢ悔いて再び彼女を苦めることは一切しなくなつたといふことである。

蓮月四十歳の頃、父の光古も亦病んで不歸の人と爲つた。全く孤獨になつた彼女は

自ら生活の道を講じなければならなくなつたのである。彼女は手づから陶器を作つてそれに自詠の和歌を書いて賣つた。貞女として、また歌人として、多くの同情と尊敬とを得てゐた彼女の陶器は飛ぶやうに賣れていつた、それを珍器として愛藏する者も多くあつた。

利に喩る都邊の陶器商のうちには、蓮月のを模倣して意外の利得を貪る者が少くなかつた、が、陶器だけは模することが出來ても、筆蹟は胡麻化すことが出來ない、狡商の企みは、のちには却つて大なる商業上の打擊を招くに過ぎなかつた。彼らは遂に相談の上相携へて蓮月を訪ね、事情を話して憐憫を請ふのであつた。自他二利の圓滿を期すべき佛教道德を奉ずる蓮月は、快く彼らの相談に乘つて彼らを滿足させるべき方法を定めた。それは、陶器だけは模倣が出來るといふので彼らに作らせ、それに蓮月が筆を執つて和歌を書きつけることであつた。是れによつて利を得て糊口を凌ぎ得る者數十名に上り、みな蓮月に多大の感謝を捧げてゐた、蓮月はそれを以て非常な滿悅としてゐたといふことである。

斯ういふ態で、蓮月の名は次第に遠近に聞えて持て囃されるやうになつた。で、諸國から上つて京都の地を踏む者、續々として詠歌を請ひ求むべく蓮月を訪ふた。蓮月はその煩を厭うて頻々に移轉して居所を昧ましてゐた、それが爲め「屋越の蓮月」の綽名さへ取つたほどあつた、が、のちには西加茂神光院の茶所に居を定めて老後を安樂に送つてゐた。

蓮月はその信仰を他力念佛の法門に立てゝ明け暮れ唱行を懈らなかつたのであるが、彼女は遂にそれによつて大安心を得たらしい。彼女の念佛三昧は、世の普通の信者のするやうな勿體ぶつた形式的のものではなかつた。明け暮れ彌陀を念じ唱名はするが、その本尊は、金光燦然たる本像や畫像を安置するのでなく、子供の玩物のやうな伏見人形を据ゑ置くのであつた。その伏見人形も、あるときは可愛い子供の形が置かれてあつたり、天神樣や御姫樣のこともあり、或は富士西行に代へられたりして、佛像が

定まつて置かれるといふのではなかつた。或る人がをかしく思つて詰り問ふと、蓮月は「本尊ばかり立派な如來様でも、此方の信心が未熟では何もならぬ。私は方寸にちやんと彌陀如來を宿して居るによつて、いつでも、どこでも、念佛申せば如何に通じるのぢや。が念佛に何か目安がなうては心もとない氣がするゆゑ何なりと本尊の標に置くまでのこと、時々變るのは近所の子供たちが欲しがるゆゑその度に與つてはまた何か置くのぢや」と答へたといふことである。

思大和尚は「三世の諸佛我に一口に呑盡せらる」と言つた。丹霞禪師は聖僧の頸に騎り、また木佛を燒いた。釋迦彌勒は是れ兒孫と傲語する禪の第一義諦に立つては、信仰の本尊を玩物扱ひにする位のことは珍らしくない。が、敬虔な他力教徒の言動として蓮月の如きは、よほど珍らしい。日々夜々彌陀を抱いて寢ね彌陀を抱いて起き、方寸の裡常住寂光の輝きに充つるといふに至つては、蓋し念佛行の王三昧で、淨土遠きにあらず、唯心是れ淨土、彌陀の法身法界遍滿、己身是れ彌陀と說く意とも相通じ、自力他力是の極致に於いて全く一般の面目と謂はねばならない。

斯うして薄命な美人蓮月の生涯は、貞婦として、また才女として、そしてまた大乘の佛徒として、その高潔の志操と利他慈仁の道念とは以て世の稱讃を博し、哀愁悲傷より轉じて洒々たる身心脱落の境地に安立するを得たのであつた。

彼女は、明治八年二月十日、八十五歳を以て安らかな大往生を遂げた。ある人がその詠歌を集めて「海女の苅藻」と題して世に刊行した。名什佳作も少くないが、次の一首の如きは最もよく人口に膾炙せられて居る。

宿貸さぬ人のつらさをなさけにて
おぼろ月夜を花の下臥

他佛はみな自佛なり、他を念ずるは遡つて自を念ずる時に同じ。

——禪餘内集

男兒何を以て貴ならん、虚空は虚空なり。
四大は四大なり、五蘊は五蘊なり、女流も
亦斯くの如し。得道は孰れも得道す。たゞ
し孰れも得法を敬重すべし、男女を論ずる
ことなかれ。これ佛道極妙の法則なり。

――永平高祖

跋

達磨傾城の圖といふものあり、碧眼の胡僧、紅妝の美人と戯るゝところ、洵に絶奇の對照なり。彼が、色即是空と秋波を送れば、此は、空即是色と微笑を洩す。這裡、甚麽ぞ、禪の妙趣を暴露せずと言はむや。

吾が友、清泉笛岡君、禪に徹し、文に巧なり。今、花色々の美人を拉し來りて、その枯木寒巖の禪骨を磨したる蹤躅を精叙し、題して『美人禪』といふ。爛漫の花には、凋落の悲哀ありと雖も、枯木却つて、常住の春を樂む所

以を說くこと、至らざるなし。夫の、達磨傾城の圖に參透するの具眼を以てせば、始めてこの書一卷、別傳の妙敎理、不立の好文字たることを看取し、色即空なるところに、美人の禪を味ふべく、空即色なるところに、禪の美人と相見すべし。若しそれ、錯つて解せば、達磨不識の一喝に眼を廻はすべく、漫に皮相の美に着せば、傾城肱鐵砲の一發に腰を拔かさむ。

大正四年十一月三日、上野寛永寺に開催せる、第二回大藏會より歸りて、
廣長舌莊の燈下に、

高島米峰識す

大正四年十一月二十五日印刷
大正四年十二月一日發行

禪門叢書第二編
定價金壹圓

著作者　笛岡芳巖
發行者　高島大圓　東京市小石川區原町六番地
印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿七番地

不許複製

發行所　東京市小石川區原町六番地　振替東京一五六八六　電話番町二六〇八
丙午出版社

大正文庫

明治昭代の榮光を記念し大正聖世の文敎に貢獻せむがために現代第一流の宗敎家學者文藝家を煩はして『大正文庫』を發行し今や全部十二冊こゝに完成す外形は電車汽車中の繙讀に便に內容は處世修養の伴侶に好し——（全部完成）

第一編　明治思想小史　文學博士三宅雪嶺先生著（定價平錢郵稅六錢）

第二編　此一筋　文學士沼波瓊音先生著（定價七十錢郵稅八錢）

第三編　來世の有無　新佛敎徒同志會編（定價七十錢郵稅八錢）

第四編　禪の極致　大內青巒先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第五編　予が婦人觀　黑岩周六先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第六編　狐禪狸詩　釋淸潭先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第七編　噴火口　高島米峰先生著（定價八十錢郵稅八錢）

第八編　ひとみの旅　杉村楚人冠先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第九編　書窓車窓　加藤咄堂先生著（定價六十錢郵稅八錢）

第十編　人と超人　ショウ原著樗利彥先生譯（定價平錢郵稅八錢）

第十一編　六十一年　文學博士村上專精先生著（定價平錢郵稅八錢）

第十二編　沈默の饒舌　內田魯庵先生著（定價八十錢郵稅八錢）

佛敎講義錄

僅に一ケ年で佛敎の大系が學び得られる

學界空前の佛敎講義錄出づ

佛敎がわからなくては日本の歷史の解釋が出來ない日本の文學も味ふことが出來ない日本文明の由來するところも知ることが出來ない從つて佛敎を知りたいといふ人は多いが唯識三年俱舍八年では手もつけられない そこで誰にでも手つ取り易く佛敎の大系が飲み込めるやうにといふので現代有數の學者に請ふてその專門とするところの學科の講義をして貰ふことにしたのである世の徒に大家の名を列して杜撰な代作講義を揭載するが如きものと同一視するとなかれ

佛敎研究法　東洋大學敎授　島地大等
佛敎概論　曹洞大學敎授　加藤咄堂
印度の佛敎　帝國大學敎授 ドクトル　荻原雲來
支那の佛敎　東洋大學敎授　境野黃洋
日本の佛敎　豐山大學敎授　境野黃洋
佛典の解說　帝國大學講師 文學士　常盤大定
法華經義釋　天台大學敎授 日蓮大學敎授　島地大等
禪學要義　宗敎大學敎授　加藤咄堂
歐米の佛敎　帝國大學講師 ドクトル　渡邊海旭
佛敎美術　帝國大學講師 文學士　中川忠順
宗敎學要義　眞言大學敎授 文學士　融道玄
基督敎綱要　慶應大學敎授 東洋大學敎授　廣井辰太郎
神道綱要　足立栗園
其他臨時講義を增加すべし

毎月一回十五日發行	一冊菊判二百頁、滿一ケ年（十二冊）完結
賜讀料	一ケ月分　六十錢
	三ケ月分　一圓五十錢
	半年分　三圓
	一年分　五圓五十錢
東京賣捌	一ケ月分　五十錢
	三ケ月分　一圓五十錢
	半年分　三圓
	一年分　五圓五十錢
合計	一ケ月分　一圓十錢
	三ケ月分　三圓五十錢
	半年分　六圓
	一年分　一圓

發行所　東京市振替小石川區原町六八　東京市小石川區原町六六五一　電話番號六二〇八　丙午出版社

『萬朝報』記者　大住嘯風先生著

現代思想講話

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由來せる傳說を究め遡んでゼームス、オイケン、ベルグソンの如き現代思想を代表する大思想家の說くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ來せる傳說を究め遡んでゼームス、オイケン、ベルグソンりて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を發ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

暮村隱士　久津見蕨村先生著

現代八面鋒

定價金八拾錢
郵稅金八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り散し十方に喝破すその鋒先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍書

暮村隱士　久津見蕨村先生著

眞人僞人

定價金壹圓
郵稅金八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の厳命を蒙ること亦數次聊か痛癢を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ僞人はこゝにその面皮を剝かるその論辛辣その評深刻洵に雄端風を生じて文に聲あるの概あり

堺　利彦先生著

樂天囚人

定價金六拾錢
郵稅金六錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉毒、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

賣文社長　堺　利彦先生著

賣文集

定價金壹圓
郵稅金八錢

叢蘭之飾　著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇拔痛快の評語　序　賣文社の記、著者自ら其の事業を語る　第一編　一、唯物的歷史觀　二、子に對する態度　三、宗教とは何ぞや　四、木下尙江君を評す　第二編　一、暮春の古戰　二、予の夢　三、墓地見物　四、寸馬豆人　五、逆徒の死生觀　六、死の趣味　第三編　一、告白、「谷川の水」（バーナード、ショウ原作）　第四編　一、告白、芝蘭喜劇　二、クレンクビュ、大杉榮　三、飯謀人耶蘇、高畠素之　佃國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓發せらる波瀾重疊神出鬼沒の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは達識能文の堺利彥先生なり一讀してルソー前に立てるの感を起さしむ

堺　利彦先生著

ルソー自傳　赤裸の人

定價金九拾錢
郵稅金八錢

カウツキー先生原著
堺　利彦先生譯

社會主義倫理學

定價金壹圓
郵稅金八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして僞善なる因習道德が唱導せらるゝ今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の蒙を啓き此の昧を照すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの人日本の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし（譯者）

幸德秋水が最後の文章

基督抹殺論

定價金七十錢
郵稅金八錢

一代の論客として知られたる幸德秋水も誤つて天地の容れざる大逆無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に吟呻せるの間特に此一卷を著す所論痛絕快絕行文悲絕愴絕鳴呼幸德秋水死に臨みて基督を扶殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の憎讀を冀ふ

文學士　渡邊又次郎先生著

最新論理學

定價金一圓廿錢
郵稅拾貳錢

本書は哲學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして內容の整頓せる簡潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要なる題目を揭げ卷末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

加藤咄堂先生著

筆と舌

定價金七十錢
郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演說と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る大文字なり

村上博士序
藤井瑞枝女史著

亂れ雲

定價金八十錢
郵稅金八錢

女史は跡見花蹊先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井宣正氏の未亡人なり夙に文才と俠氣とを以て知らる「亂れ雲」一編集むる處二十餘章四百五十餘頁諷刺教訓皮肉或は鋭き觀察或は隱れたる溫情あらゆる方面を輕妙洒脫なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

「無我愛」音唱者
伊藤證信先生著

新氣運

定價金八十錢
郵稅金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脫却して世の罵詈嘲笑輕侮憎惡の中に立ち臆面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの！

三宅雪嶺先生序
高島米峯先生著

廣長舌

定價金七十錢
郵稅金八錢

加藤咄堂先生日はく「米峯今胸中鬱勃の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企ざて及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を剖る洵にこれ堂々警世の大文字」と

加藤弘之先生序
高島米峯先生著

惡戰

定價金八十錢
郵稅金八錢

著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

島田三郎先生序
高島米峯先生著

理想的商業

定價金二十五錢
郵稅金六錢

賣ると買ふとは對等なりお客威張つて商人屁こ垂れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を說きこの道を敎へ以てお客樣といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勸め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは卽ちこの書なり

前外務大臣　伯爵　林董閣下序
東北大學總長　澤柳政太郎先生序
櫻所　干河岸貫一先生著

修養史譚

定價金壹圓
郵稅金八錢

林伯爵曰はく「此の書を繙くに古今東西の史乘より異世同轍の事實二百對を擧げたる者にして敎師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

前外務大臣 伯爵 林 董閣下纂譯

修養の模範

定價金七拾錢 郵稅金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美譯の乏しいのに弱り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る譯者これを憂へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を纉譯摘錄して遂にこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である

文學博士 村上專精先生著 通俗

修養論

定價金壹圓 郵稅金八錢

古聖實踐の芳躅を辿り前賢研究の結果を收め苟も規箴とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を說明し苟も模範とするに足るべき善行美譯は悉くこれを蒐錄して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だあらざる精到完備の修養書たらむなり

文學博士 村上專精先生著 改訂增補

自信錄

定價金六拾錢 郵稅金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々巳の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまゞ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節說いて至らざるなく述べて盡さゞるなし進歩せる佛教學者の見解は此書によつて知るを得べし

文學博士 村上專精先生著

誠のしるべ

定價金四拾錢 郵稅金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士 村上專精先生著

女性訓

定價金四十錢 郵稅金六錢

本書の內容は天職中庸質素謙讓節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を攫み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

スタンフオルド大學總長 ジヨルダン博士原著 マスター、オブ、アーツ 中村平先生譯

人物の修養

定價金五十錢 郵稅金八錢

澤柳前文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く、「ジヨルダン博士は當今世界有數の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所說その意見を知らむと欲するの情並に之を知ることに依て利すること尠からざるは言を待たず．．我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

ウキリヤム、ハイド氏原著 鈴木券太郎先生譯補 修養處世

自己測量

定價金五十錢 郵稅金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡德邪辯の鞭朴人格完成の砥礪立身處生の嚮導社會道德の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年諸等がこの生活難の世に處して新しき運命の祕庫を開くべき鍵はこゝにあり

黑岩周六先生講演

人生問題

定價金七拾錢 郵稅金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を說き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黑岩先生自ら人生問題に逢着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て玆に此書あり叡ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶くは平穩と滿足と活力とを得て溫く且つ光ある人生に觸着することを得ん

東北大學總長
澤柳政太郎先生著

退耕錄

正價金壹圓
郵稅金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尚ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣炬あり理窟あり警拔にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる諧笑あり言はんと欲する所は言ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に憂國慨世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

フエヒネル先生原著
文學士 平田元吉先生譯

死後の生活

定價金五拾錢
郵稅金八錢

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱橫に叙述したる詩と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失びし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豐富なる暗示則敎を與ふるや疑ふ可からず

杉村縱橫先生譯編

强肺術と肺病全快談

定價金九十錢
郵稅金八錢

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を收めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣藥に欺かれたる人々は本書を繙いて天來の福音に接せよ

文學博士 井上圓了先生著

南半球五萬哩

定價金九十錢
郵稅金八錢

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峽まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十餘上更に花を添ふ

文學博士 井上圓了先生著

活佛教

定價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

明治の宗教界思想界を震駭せしめたりし「佛教活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛教をして活佛教たらしむるの福音

帝國大學教授
文學博士 高楠順次郎先生著

國民と宗教

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳說せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演說講話の好模範たるべし◉附錄として研究上修養上極めて重要の論文數種を收む悉く學界の珍

文學博士 松本文三郎先生閲
文學士 羽溪了諦先生著

釋尊の研究

定價金壹圓
郵稅金八錢

本書筆を釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に說き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脫の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の謬論を破る誠に教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

京都帝國大學文科大學長
文學博士 松本文三郎先生著

彌勒淨土論

定價金壹圓
郵稅金八錢

宗教學上殊に佛教史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要なる地歩を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明に歸して光輝を放てるも其他の半面は「彌勒淨土」の埋沒によりて全然暗黑に歸すとは豈佛教史上の一大缺點にして又實に佛教界の一大恨事ならずや松本博士多年の蘊蓄を傾けその專攻する學科の立脚地より「彌勒淨土の由來淵源を詳論し博士の舊著『極樂淨土論』と相待つて玆に佛教の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はすして恣に佛教の淨土思想を談ぜんとするものぞ

ポール、ケーラス先生著
學習院教授鈴木大拙先生譯

阿彌陀佛

定價金三十五錢
郵稅金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小說的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評嘖々たることや弊社曩に十年博士と居を同しうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

東京帝國大學講師
文學士 常盤大定先生著

釋迦牟尼傳

定價金七十錢
郵稅金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳說なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳說が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳說の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士 遠藤隆吉先生著

孔子傳

定價金壹圓四十錢
郵稅金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豐富にその觀察極めて銳利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

高等師範學校講師
耳理章三郎先生著

王陽明

定價金一圓五十錢
郵稅金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈偉ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學說とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

東洋大學講師
境野黃洋先生著

增補 聖德太子傳

定價金五十五錢
郵稅金八錢

大內青巒先生序
高島米峰先生著

一休和尚傳

定價金九十錢
郵稅金八錢

曹洞宗大學教授
忽滑谷快天先生著

達磨と陽明

定價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

元日に觸髏を振廻はして人の度膽を拔き末期に糞を睇つて梵天に捧げた彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうともせず一襲一笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休痴か狂かはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく道德の工夫修養の方法爲學の用心精神錬磨人格發成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり

明楊起元評註
加藤咄堂先生和譯

和譯維摩經評註

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傍訓を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談せむと欲する者には勿論講習本として亦最も適當なり

加藤咄堂先生著

原人論講話

定價金六十錢
郵稅金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の嶄然一頭地を拔く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし著者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ簡頭には添ふるに古人の解說を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤咄堂先生著

通俗講話の理論及方法

定價金九十錢
郵稅金八錢

通俗教育の必要日に逼りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豐富なる經驗とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感動せしめ得べきかの理論と方法とを極めて親切に解說し多くの例話を擧げてその使用法を示されたるものなれば教化の秘訣雄辯の奧義講話の資料收めて一卷の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を繙かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師 清譚先生著

寒山詩新釋

定價金五十錢
郵稅金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として拔けざることや著者精深禁大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師 清譚先生著
和漢高僧

名詩新釋

定價金五十錢
郵稅金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉り和は虎關以後絕海義堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此くの如きもの恐くは曠前なるべし

慶應義塾大學教授
忽滑谷快天先生評釋
和漢

名士參禪集

定價金壹圓
郵稅金六錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の貞宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張無盡斐休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の鉗鎚に接するを得しむ

マクス、ミュラー博士原著
文學士 清水友次郎先生譯

宗教學綱要

定價金五十五錢
郵稅金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マックス、ミュラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり

第三高等學校教授
文學士 野々村直太郎先生著

宗教と倫理

定價金五十錢
郵稅金八錢

正にこれ新宗教論なり新道德論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との饑渴に惱める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附錄には二宮尊德翁の宗教論を評す

眞宗補教 北條蓮瑞先生著

眞宗の教義

定價金二圓
郵稅金十二錢

眞宗は實に日本佛教の精華にして又實に日本佛教の最大勢力なり本書は博識篤學を以て聞えたる北條師が多年の蘊蓄を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法然上人と其資蓮如上人との教義を信仰上より研究したる結果を組織的に叙述したる者なり他力教の秘奧を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を竊ふ

アー、エフ、ステンツラー先生原著
エル、ビッシエル先生增訂
ドクトル、フイロソフイエー
荻原雲來先生譯補

梵語入門

定價金壹圓
郵稅金八錢

一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は成な歐語の梵文典を使用すされど歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學はざる可からざる不便あり第二價格低廉ならす以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初步たらしめむがために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は備少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

著者南天竺伽倫に入りスマンガラ僧正の會下にありて巴利語を修むること多年其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり敍述の前後には多大の注意を拂ひて簡より繁に入り易より難に進むの方法に從ひたれば初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべし

文學博士 高楠順次郎先生閲
曹洞宗大學教授
立花俊道先生著

巴利語文典

定價金一圓
郵稅金八錢

慈雲尊者眞筆
高楠順次郎先生序
阿滿得壽先生著

悉曇阿彌陀經

定價金壹圓
郵稅金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり特に悉曇と冠語せしは新譯梵字に簡ばんが爲なり梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本、辭書、唐譯二譯を揭げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺ふに易からん

平子鐸嶺先生遺著

補校法王帝說證註

上宮聖德
正價金一圓
郵稅金八錢

『上宮聖德法王帝說』はその記事切實その文詞醇古多く寧樂巳往の記錄を取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須ゐず而して狩谷棭齋先生の『證註』に至つては群說を折衷し正譌を辨別して先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽强記にして史眼犀利敏捷先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足らざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

文學博士 村上專精先生編

科註原人論

定價金十二錢 郵稅金二錢

科註大乘起信論

定價金十六錢 郵稅金二錢

きたれば學校の教科書學會の論本として最も適當なり

高島米峰先生著
學生參考

東洋史

定價金十三錢
郵稅金二錢

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべからむも學生を資くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑はざるなり」と

文學博士 三宅雪嶺先生著
增訂

偉人の跡

定價金壹圓
郵稅金八錢

古今東西の偉人數十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は躍如として技に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉著に問へ

文學博士 三宅雪嶺先生著

小泡十種

定價金四十五錢
郵稅金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なるは世既に定評あり今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を說き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩渺盡きざる大河となり散じては紛紛限りなき飛沫となる小泡か激湍か靈し近代稀有の快著也

文學博士　三宅雪嶺先生著

明治思想小史

定價金五十錢
郵稅金六錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高壇に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を逞しうして劃切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の產物なりしかを知悉して以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これ眞に大正國民必讀の書

文學士　淺波瓊音先生著

此一筋

定價金七十錢
郵稅金八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想あり、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそうな方にのみ、これを俏む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

新佛教徒同志會編

來世之有無

定價金七十錢
郵稅金八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するのか滅しないのか元來吾等に靈魂などゝいふものがあるのか無いのか凡そ此くの如きの謎問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑團も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

高島米峰先生著

現代青年論

定價金十五錢
郵稅金二錢

本書は著者が某會社の青年に向つて講演せるものゝ筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり內容目次左の如し
一、青年の力—二、今の青年は依賴心が强い—三、今の青年には氣慨がない—四、今の青年は成功を急ぐ—五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する—六、今の青年は思想が薄弱である—七、今の青年は信仰が乏しい—八、今の青年は同情が乏しい

大內青巒先生著
結城素明畫伯畫

禪の極致

定價金六十錢
郵稅金八錢

不立文字の敎理も、文字に依らざれば知ること能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ。古來禪を說くもの、徒に難解の語句を弄して、人をして愈々迷はしむることを。大內先生學深く德高く、敎禪二兩に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、幽玄の理を說き、深遠の法を語ること、殆ど天下獨步、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附錄『五位頌講話』また先生獨創の見識を以て、縱橫に講解す、蓋近來の大文字なり

黑岩周六先生著

予が婦人觀

定價金六十錢
郵稅金八錢

進步的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黑岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々樣々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子敎育家の精讀を冀ふ

釋　清潭先生著

狐禪狸詩

定價金六十錢
郵稅金八錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窟狸詩の窟一蹴して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に橫行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

中原鄧州老師著
大石正巳居士序
飯田欖隱居士跋

南天棒禪話

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈敎懇到兒女童孩も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷卷中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底のもの縱橫に說き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり人若し南天の痛棒亂下し來るの間に立ちて平然としてこれを喫了し得ば則ち人間の大事こゝに成るべし冀くばまづ聊かこれを試みよ

釋清潭先生主筆
月刊雜誌
漢詩
一冊五錢
一年分五十錢

釋清潭先生を中心とせる漢詩圓淡社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を掲載す
別に漢詩漢文の添刪代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋鳳洲先生著
晩晴樓文鈔
定價金八十五錢
郵稅金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり說あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり贊銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを憂ふるを須ゐざるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を極めて各篇に讚評を加ふ卒然卷を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す絲陰深處にこれを繙かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

村上專精先生序
高島米峯先生著
噴火口
定價金八十錢
郵稅金八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を慘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその舊著『廣長舌』『惡戰』等に比し來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士 村上專精先生主筆
月刊雜誌
人道講話
一冊七錢五厘
一年分八十二錢

『人道講話』は村上先生の人道講話を連載する者
『人道講話』は教育と宗教と道德との三面を有す
『人道講話』は精神の涵養を以て教育の本領とす
『人道講話』は人道の實踐を以て宗教の要務とす
『人道講話』は父母の孝養を以て道德の大本とす

記者 松本博士、内藤博士、新村博士、上田博士、小川博士
月刊雜誌
藝文
一冊廿二錢
半年分一圓廿錢
一年分二圓卅錢

『藝文』は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也
『藝文』は東西兩洋の學術文藝に對し最嚴厳深刻の批判を下さむとする者也
『藝文』は關西思想界の中心として餘て關東の思想界を風靡せむとする者也

東京朝日』記者
杉村楚人冠先生著
ひとみの旅
定價金六十錢
郵稅金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、專ら現代を寫し、人間を論ず。曾て、洛陽の紙價を貴からしめたる『大英遊記』以來の名文にして、又曾て、發賣禁止の厳命を蒙りたる『七花八裂』以來の奇著なり。

加藤咄堂先生著
書窓車窓
定價金六十錢
郵稅金八錢

天地の秘奥を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天籟あり、地籟あり、人籟あり。これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の德澤に浴すべし。内に在りては書窓の良師。外に出でゝは車窓の善友、一卷の書また尊貴なるかな。

學習院教授
帝國大學講師鈴木大拙先生著
スエデンボルグ
定價金五十錢
郵稅金八錢

神學界の革命家、天界地獄の遍歷者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、出俗脫塵の高士、之を一身に集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲漸くまさに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此書成る所以。

文學博士　村上專精先生著

六十一年

定價金九十錢
郵稅金八錢

これ村上博士が過去六十一年間惡戰苦鬪の活歴史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て龜鑑とすべき絶好の立志傳たり殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する忌憚なき評論は明治佛教の側面史として教家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり

文學博士　松本文三郎先生著

佛典の研究

定價金九十錢
郵稅金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリチー也多年その蘊蓄を傾けて研究せられたる佛典の研究は正に先哲未到の新說なりとす佛典の眞僞を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず

久津見蕨村先生著

ニイチエ

定價金九十錢
郵稅金八錢

ニイチエの研究ニイチエの理會ニイチエの祖述に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所今其爛熟の想と奇峭の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ

文學博士　松本文三郎先生著
增補

宗教と哲學

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書全編十有四章まづ筆を「釋尊は何を說きしか」に起し「宗教と道德」「研究と信仰」等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在ることを說明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す慨ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎

東洋大學教授土屋鳳洲先生編
評解

唐宋八家文鈔

定價金四十五錢
郵稅金八錢

夫の唐宋八大家文が文章の模範と仰がるゝもの久し矣惜しいかな卷帙浩瀚初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず今我が土屋先生これを遺憾となし八大家の名文中更にその精髓五十編を選びこれに細評を加へて以て文章の結構作法を知らしめこれに詳解を施して以て故事熟語の意義を明にす學校教科の用書として甚だ適當なるのみならず地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり

帝國大學講師
學習院教授鈴木大拙先生著

禪の第一義

定價金一圓
郵稅金八錢

禪は東洋に於ける精神界の特產なりしかも從來誤つて山林の徒のみによりて拈弄せられ活きたる人生と殆ど沒交渉なるかの觀ありしは蔑し未だその第一義を闡明しその着手の處を說述することの徹底せざりしに基するものならずむばあらず著者參禪辨道三十年その實驗の歷程を精叙しその所得の公案を解說し一は以て初學者の指針となし一は以て人生の苦悶を除去せむとす不立文字教外別傳の禪も本書出てゝその近代的色彩の顯る鮮なるものあるを看取し得む

內田魯庵先生著

沈默の饒舌

定價金八十錢
郵稅金八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老維摩內田魯庵先生が沈默の懷中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を說き生活の難易を敎ふその言の懇切なるその論の穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評し咄哉と言はむは蔑し未だ方丈の妙諦に參する能はざるもの

スエデンボルグ著
鈴木大拙先生譯

新エルサレムと其教說

定價金六十錢
郵稅金八錢

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教說にして救濟には信と行とを要すること愛卽ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸說を簡明適切に述べたる快著

バアナードレッヲ作　堺利彦先生譯

人と超人

定價金九十錢
郵稅金八錢

シヨウ熟金感の今彼の最大作の課書出づ彼れの生命哲學彼の兩性觀彼の皮肉彼の諷刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熟罵悉く此一篇の中に在り
課書內容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、シヨウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が倫敦で見た人と超人（松居松葉）等あり

文學博士　井上圓了先生著

おばけの正體

定價金五十錢
郵稅金八錢

本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者懐しい者悲しい者憐れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の眞相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聽きたがる小供のためにも「幽靈の正體見たり枯尾花」などゝ悟つたつもりの大人のためにも趣味と實益とを與へること多大である

東洋大學長　大內青巒先生著

青巒禪話

定價金壹圓廿錢
郵稅金八錢

この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう澤山なりそれ以上廣告文でコケを威す必要いづこにかあるしかも試みに一二首を加ふれば平談以て微妙の法門を說破し俗話以て別傳の眞諦を闡明す題を設くる六十有餘悉くこれ天地の祕奧を探り人心の機微に觸る迷悟凡聖の如きたゞ讀者の擇ぶところに委するのみ

文學博士　高楠順次郎先生
文學士　木村泰賢先生　共著

印度哲學宗教史

定價金貳圓
郵稅金八錢

本書は著者が印度の哲學宗教の大成は日本學界の本務なりといふ確信の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て講述せる稿本を增補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり吹むるところ吠陀、梵書、奧義書、經書及び諸學派の開展に涉り洵にこれ印度の根本思想を說述して餘さゞるなきもの苟も世界無比の寶庫と稱せらるゝ印度古代の文明について闡明するところあらむと欲するものは須くまづこの祕鍵を攫らざるべからざる也

新井石禪老師著

修道禪話

定價金一圓
郵稅金八錢

新井石禪老師は學に於て德に於て舌に於て筆に於て現代禪門第一流の人なり今や世俗の往往にして野狐禪に滿足し邪禪に墮在するもの尠からざるを見て慈心到底默止するに堪へず玆に活禪談を試みて修道處世の南針を指示す釋尊一字不說の妙諦達磨西來の眞意こゝに於てか始めて了了明明

學習院教授
帝國大學講師　鈴木大拙先生譯

神智と神愛

定價金一圓五錢
郵稅金十二錢

本書は天界地獄の遍歷者として學者宗教家を驚倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を率直に披瀝したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より說き起し造化の大功人生の目的を闡明す所論警拔斷案透徹譯筆明快

高島米峯先生著

店頭禪

定價金八十錢
郵稅金八錢

禪坊主の禪にもあらず野狐禪の禪にもあらず語默動靜皆是禪の禪也學林の禪にもあらず僧堂の禪にもあらず鷄聲堂の帳場格子裡に獨り自ら實參實究したるところの禪也傳統の禪にあらずして店頭の禪也空想の禪にあらずして創造の禪也即是れ生活の實驗也信仰の告白也

建仁寺派管長　竹田默雷老師著

禪の面目

定價金一圓
郵稅金八錢

語も亦雷の如く默も亦雷の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絕版せる『默雷禪話』二卷數百則中より奇峭の論と懇到の說とを選びて百五十則を獲たりこれを世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に逍遙するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

『修養世界』主筆　菅原洞禪師著

禪林奇行

定價金壹圓
郵稅金八錢

和漢古今の居士禪僧が奇行佳話を蒐むるもの實に百數十項一として古聖證悟の過程前賢參究の所得たらざるなし綿密なる佛祖の行履潑剌たる禪林の消息正にこゝに盡きたりと稱すべき也

禪宗演老師著

拈華微笑

定價金壹圓
郵稅金八錢

釋尊拈華し迦葉微笑す個中の消息何人か會し又何人か會せざる會する者を聖と稱へむも當らず會せざる者を凡と呼ばむも亦當らず凡聖一如の境地は畢竟此書を心讀し體讀したる者にして始めて到達し得べしとなす耳

京都市平安中學講師
トーマス、カービー先生著

英文佛教讀本

定價金五十錢
郵稅金六錢

著者は敬虔なる佛教信者として熱心なる佛教研究者として夙に世に推重せらるゝ英人にして本書收むる所釋尊の傳記印度諸王族の佛教傳播に盡しゝ狀況及歐米に於ける佛教學者の筆に成れる論文英語に飜譯せられたる佛典の拔萃並に將來佛教の歐米に傳播すべき趨勢に關する著者の豫見等凡そ二十餘章蓋し佛教學校の英語教科書として唯一無二の良書たり

帝國大學講師
ドクトル荻原雲來先生著

梵漢對譯佛教辭典

定價金五圓
郵稅金十二錢

本書收むる所顯密二教の法數名目を始め經律論三藏中の學語は勿論佛菩薩天龍八部天象地儀山川草木飲食器皿數方時より動詞副詞に至るまで語數甚だ豐富にして單に佛教辭典としてのみならず又梵漢辭典としても未曾有の寶藏なりこれを以て佛教を知らむと欲するもの梵語を學ばむと欲するものは言ふまでもなく一般語學者印度文藝の研究者に取りても亦唯一無二の寶典たり

曹洞大學長　秋野孝道老師著

禪の骨髓

定價金壹圓
郵稅金八錢

以心傳心の禪直指人心の禪そこに何の膚肉ぞ何の骨髓ぞ今吾が秋野老師特に『禪の骨髓』と題して一卷を成す或は言はむ是れ好肉上の剜と曷ぞ知らむ是れ指月の指なることを世の指に執着するものは則ち去れ迷雲一たび拂へば眞如の明月耿々として天地こゝに朗然これ此書を學人に薦むる所以

原僧運老師著

禪の捷徑

定價金壹圓
郵稅金八錢

教外別傳と說き不立文字と說き而して實參實究を强ふ禪も亦難いかな曷ぞ知らむ語默動靜皆是禪喫茶喫飯も亦即ち是れ禪ならざることなきを果して然らば人誰れか禪に眠り禪に覺め禪に生き禪に死せざるものぞ僧運老師八十年の禪生涯その行業直ちにこれ禪の眞諦今獎心默止し難くて敢てこの捷徑を示す寧ろ却て大道坦々として長安に通ずるものあらむ

荒井溟光先生著

道元禪師

定價金壹圓
郵稅金八錢

曹洞宗の開祖道元禪師遠く宋土に渡りて慕道尋師し深く佛陀所說の核心を探り群に祖師西授の單的を領す而して歸來喝破すらく「空手還鄕」と空手還鄕の那一曲知らず何等の妙調ぞ佛法の要旨玆に存し禪の眞髓玆に盡く著者今禪師が一代の行狀事蹟を描寫するに流麗にして巧妙なる文辭を以てし禪師の風丰面目をして卷中に躍動せしむ通俗にして文學的なる禪師傳は蓋し此書を以て嚆矢とせむ識者これに依つて曹洞禪風の淵源を究むべく又これに依つて悟徹の洪範を得べし

原田祖岳先生著

參禪の階梯

定價金壹圓
郵稅金八錢

原田老師洞濟二家の宗風を把持し銀山鐵壁容易に攀づべからざる底の禪に姑く階漸を設けて學人のために參禪の一路を示す夫の胡麻に大悟を語りて鬼窟裡の活計を作すが如き野狐精者流は乃ち問はず苟も荊棘林を透過して清風明月の趣を會得せむと欲する者は須らく秩序整然たる階梯を辿れ

大石正巳君序　飯田橋隱君跋
南天棒中原鄧州老師著

南天棒禪話

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈敎懇到兒女童孩も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷卷中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底のもの縱横に說き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり

東洋大學敎授　境野黃洋先生著

活ける宗敎

定價金一圓
郵稅金八錢

著者が限りなき渴仰と量りなき崇敬とを拂つて居る日本佛敎の代表的偉人中特に聖德太子傳敎大師弘法大師法然上人日蓮上人道元禪師親鸞上人蓮如上人白隱禪師の人格と敎義と信仰とを精叙したもので正にこれ一部の「列傳體日本佛敎史」であるしかし世間に有りふれた冷かな抽象的な人間の血の氣の通つて居ない學究的なものではなくて此等の偉人が親しく體驗したる內的生活の上に活躍して居る眞の宗敎を語つたものであるこれによつて佛敎の大意もわかるし健全なる佛敎の信仰も理會せられる

醫學博士　岡島狂花先生新著

現代の西洋繪畫

定價金一圓六十錢
郵稅金十二錢

岡島博士多年研鑽の所得を紐綴して玆に此の書を成すその內容の概略を摘記せむか。一、代表的名畫三十二葉を挿入したる事二、縱來ありふれたる氣分的斷片的文集にあらずして科學的の著作なる事三、現代西洋十六ケ國の繪畫を取扱ひたる事四、筆を太古の繪畫史に起し古き傾向より推移に入り進みて新しき傾向即ち印象派、新印象派、後期印象派、未來派、色彩象徵派、立體派より昨年分れたるオルフイズムに至るまで悉く精叙して盡さゝるなき事五、一千餘語の原語索引を附したる事六、現代の版畫を七節に分ち廣告畫にまで論及したる事

加藤咄堂先生
高島米峯先生　推讚

笛岡清泉先生著

美人禪

定價金一圓
郵稅金八錢

加藤咄堂先生曰はく「戀に泣く美人が嬌態を寫して佛々祖々の玄機を語る文に艷冶の趣あり」と高島米峯先生曰はく「逸廢傾城之圖に參透するの具眼を以てせば始めてこの書一卷別傳の妙數理不立の好文字たることを看取し色即空なるところに美人の禪を味ふべく空即色なるところに禪の美人と相見すべし」と

文學博士　高楠順次郎先生閲

帝國大學講師　文學士　木村泰賢先生著

印度六派哲學

菊判六百五十頁
定價二圓三十錢
郵稅十二錢

六派哲學（數論、瑜伽論、勝論、正理論、ミーマーンサー、ヴーダーンタ）は印度哲學の代表的思潮にして一元論二元論多元論の爭汎神論有神論無神論の別機械論目的論虛無論の主張等一としてこの中に含まれざるはなく又これを學科の性質より見れば物理學論理學純正哲學宗敎哲學實際哲學等悉くこれを網羅せずと言ふことなし宜哉歐米の學界單に印度哲學とし言へば直に以て六派哲學を意味するが如き狀あることや然るに我國未だ嘗てこれに關して權威ある著述の發表せられたるを聞かず眞に學界の一大恥辱なりとす木村先生夙にこれを慨し研究多年漸くその完成を告ぐるや更に東京帝國大學に於てこれを講ずること一學年その間又多少の補訂を加へて遂に汎くこれを世に問ふに至れりしなり時恰もタゴールによつて今更の如く印度思想の雄大深遠なるに驚嘆する者多き貧弱なる我國の思想界に向ひ本書の如き先人未到の研究にして斯學最高の權威たるべき名著を推薦することを得たるは實に弊社の誇たるのみならざる也

スエデンボルグ著　帝國大學講師　學習院敎授　鈴木大拙先生譯

神慮論

菊判六百五十頁
定價二圓卅錢
郵稅十二錢

『神慮論』はスエデンボルグが玄奧神祕なる宗敎を知るべき一大著述なり『天界と地獄』は現世と離れて離れざる心界を描出し『神智と神愛』は絕對無限性の神德を說破し而して『神慮論』は實に此の神德が萬物の上に現はるゝ所以を詳述したるものにして天界地獄の遍歷者神祕界の大王神學界の革命家たるスエデンボルグ氏の所說を知らむと欲する者は本書を讀め

東京小石川原町六六八　東京小石川原町六五一　東京小石川原町六三五　東京小石川原町六三一　東京麻布區東桜町六　丙午出版社　鷄聲堂

加藤咄堂先生新著▲教育家宗教家無二の寶典

通俗講話の理論及方法

總クロース箱入
定價 九十錢
郵税 八錢

文部省が一たび通俗教育調査會を設立し通俗講話の必要を鼓吹するや天下の教育者翕然としてこれに靡き市府縣の教育會より郡村の教育會に至るまで擧げて通俗講話のために努力せざるものなしたゞその最も憾みとするところは講話者たの人を得ることの難きにあるが如し惟ふにこれ現時の教育界宗教界學術界を通じて演說說教講義を爲す人の乏しきがためにあらずしてたゞ通俗講話の理論を知悉し方法に慣熟したる人の少きがためならずんばあらず

本書は通俗講話に多年の研究と豐富なる經驗とを有せる加藤先生が帝國教育會東京府教育會及その他各府縣の教育講習會の懇請によりて親しく通俗講話の理論と方法とを說述せられたるものを基礎となし更にこれに幾多の講話材料を增補してこの一卷を成す洵に斯界空前の新著たり苟も講壇に立たむと欲する人一たびこの書を繙かむか忽にして一個理想的の通俗講話者たるを得む

弊社はかゝる實益と趣味とを併せ有する名著を出版してこれを世の演壇上の人士及び將に演壇に立たむとする諸君の前に提供することを得たるを甚しく光榮とするものなり

東京小石川區原町 貯東京一五六八六
丙午出版社 東京小石川區原町 貯東京一三五三
鷄聲堂

325
378

終